

プロレスこそが最強の
格闘技？

ネコガミ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様転生して超恵体を得たオリ主が、バキワールドでプロレスラーとして生きていくお話。

目次

第1話『恩人とプロレスラー』	1	第8話『少年とプロレスラー』	38
第2話『金持ち爺様とプロレスラー』	6	第9話『少年の父と軍人とプロレスラー』	44
第3話『婚約者とプロレスラー』	11	その1	—
第4話『超実戦柔術家とプロレスラー』	16	第10話『少年の父と軍人とプロレスラー』	51
第5話『医者とプロレスラー』	21	その2	—
第6話『空手家とプロレスラー』	26	第11話『山籠りする少年とプロレスラー』	58
第7話『空手家とプロレスラー』	32	その2	—
		第12話『山籠りする少年とプロレスラー』	65
		その2	—
		第13話『空手界の最終兵器とプロレスラー』	74
		その2	—
		第14話『空手界の最終兵器とプロレスラー』	80

第15話『空手界の最終兵器とプロレスラー』	その3』	85	幕間『その頃の大人達』	その6』	116
第16話『アメリカ旅行とプロレスラー』		91	第22話『中国旅行とプロレスラー』		120
第17話『アメリカ旅行とプロレスラー』		96	第23話『中国旅行とプロレスラー』		126
第18話『アメリカ旅行とプロレスラー』	その2』	101	第24話『中国旅行とプロレスラー』	の2』	130
第19話『アメリカ旅行とプロレスラー』	その3』	106	第25話『中国旅行とプロレスラー』	の3』	134
第20話『アメリカ旅行とプロレスラー』	その4』	111	第26話『中国旅行とプロレスラー』	の4』	139
第21話『アメリカ旅行とプロレスラー』	その5』	144	第27話『中国旅行とプロレスラー』	の5』	144

第33話『親子喧嘩とプロレスラー』	169	そ	第33話『親子喧嘩とプロレスラー』	197
の11』	169	そ	最終話『プロレスは最高の格闘技です』	192
第32話『中国旅行とプロレスラー』	166	そ	の6』	192
の10』	166	そ	第38話『親子喧嘩とプロレスラー』	188
第31話『中国旅行とプロレスラー』	163	そ	の5』	188
幕間2『老拳法家の回想』	159	そ	第37話『親子喧嘩とプロレスラー』	184
の9』	159	そ	の4』	184
第30話『中国旅行とプロレスラー』	155	そ	第36話『親子喧嘩とプロレスラー』	180
の8』	155	そ	の3』	180
第29話『中国旅行とプロレスラー』	151	そ	第35話『親子喧嘩とプロレスラー』	177
の7』	151	そ	の2』	177
第28話『中国旅行とプロレスラー』	148	そ	第34話『親子喧嘩とプロレスラー』	174
の6』	148	そ	の1』	174

第1話 『恩人とプロレスラー』

「ツシャア！」

180cm台の筋骨隆々な巨漢がリングの上で跳びドロップキックを放つ。

それを胸板で受け止めた190cm台のベビーフェイスな巨漢がリングの上で倒れると、ドロップキックを放った巨漢がコーナーポストを登る。

「フッ！」

コーナーポストを登った巨漢は鋭い呼気と共に高く跳び上がるとリングに倒れるベビーフェイスにエルボードロップをくらわせる。

そしてそのままフォールをするとレフェリーにより3カウントが数えられたのだった。



「デビュー戦惜しかったぞ三浦！」

「いい試合っぷりだった！次も応援するからなあ！」

お客さんの声を身に浴びながら疲労を現す様に息を荒らげてリングから去っていく。

そして控え室に入ると『演技』を止めた。

「良意（よしおき）、お疲れさん」

「あつ、猪狩さん。お疲れ様です」

俺が所属するプロレス団体の社長である猪狩完至（いがり かんじ）さんに軽く頭を下げる。

「で、どうだったよ？」

「主語が無いと何を聞かれてるかわかりませんよ」

「おいおい、そこは察しろよ」

13歳の時に猪狩さんにスカウトされてプロレスの道に入って早3年、多少の軽口を叩けるくらいには猪狩さんとの交遊がある。

とはいっても大喰らいな俺に腹一杯食わせてくれる猪狩さんには頭が上がらないと言っても過言じゃない。まあ、これから猪狩さんを儲けさせて恩返しをしていくつもりではあるんだがな。

「193cm 120kg……デビューしたての16のガキとは思えんサイズだな」

「あつ、高校の身体測定で測ったら伸びてたんで195cmです。体重も増えてました」
「くくくつ、結構結構。で、どうだったよ？」

相変わらず主語無く問い掛けてくるが、その問いにはキチツと答える。

「ぶつちやけ拍子抜けですね。あんなもんなんですか？」

「ハハハハッ！」

無礼千万な答えを返すと猪狩さんは大笑いした。

「すまんが今時の連中はあんなもんだ。俺や斗羽さんが若い頃はもつと本物のプロレスラーがいたんだがな」

「そうですか、それは残念ですね。」

さっきの試合はかなり気苦労した。プロレスの基本の形である手四つを組んだ時に、相手の握力が弱すぎて危うく握り碎きそうになったからなあ。

もしこれから先もあんな気苦労をするなら俺はストレスで頭部の長い友を失う事になるかもしれない。……猪狩さんに恩返しが終わったら引退しようかな。

「おっと良意、シャワーを浴びて着替えろ。出掛けるぞ」

「出掛けるってどこに？」

「御老公が飯を奢ってくださるとき」

あの格闘好きな爺様か。まさかまた俺を地下の試合に出すつもりか？まあ、報酬がいから構わないけどさ。

生まれ変わってから16年。日本人の父と母の間に生まれた俺こと三浦 良意（みう

ら よしおき）は、前世では見る専門だった格闘と武術の世界にドッキリと浸かっている。

そういうば少し前に親父がうちの家系は元々は戦国武将の家系だったと言ってたんだが……本当かねえ？



side : 猪狩完至

良意との話が聞きたい？いいぜ。

俺が良意の奴を見つけたのは偶然だった。

プロレスを始める前の俺は陸上競技で砲丸投げをやってたんだが、その時の伝でとんでもない中坊がいると聞いて話半分のもりで足を運んだのさ。

そこで一目見てわかったぜ。モノが違うってな。

年齢13で180cmを越える身長。各種陸上競技の中学記録どころか高校記録すら塗り替えちゃう身体能力。そしてそんな身体能力を苦もなく使いこなすちまう身体操作能力。

気が付けば俺は自己紹介もそこそこに良意を飯に誘っていたんだ。

そして近くのアミレスで良意の食いつぱりを見て俺は震える程の歓喜つてのを味わった。

どんだけデカイ身体を持つてたつて食えなけりや強くなれねえ。そして食うつてもまた才能なんだ。

良意は強くなる為の才能をこれでもかと持つてやがった。嫉妬するのも馬鹿らしくなるぐれえデケエ才能をな。

あいつをプロレスに誘った時になんて言ったと思う？『腹一杯飯を食えますか？』だ。笑えるだろ？強くなるとかあいつにはどうでもいいことなのさ。あいつは生まれながらに強者つてことを無意識に自覚してんだらうな。

あん？全盛期の俺とどっちが強いかって？

んく……わかってねえ、お前さんわかってねえよ。

あいつはどっちが強いかって比べる様な存在じゃねえのさ。

まあ強いて言うなら……あいつと同様に生まれながらの強者なら、あいつと強さ比べを出来るだらうな。

第2話『金持ち爺様とプロレスラー』

「おお、良意。よお来たー！」

俺は猪狩さんと共にとある高級料亭に足を運ぶと、そこには既に徳川家の末裔とかいう徳川の爺様が待っていた。

「御老公、私はオマケですか？」

「おっとすまんすまん、猪狩も座ってくれい。さあ、先ずは腹拵えじや」

徳川の爺様がパンパンと手を叩くと次々と料理が運ばれてくるので、俺はそれらを次々と腹に収めていく。

「い〜い食いつぶりじやのう」

「私も若い頃はそれなりに健啖家でしたが、ここまでではありませんでしたな」

「ほっほっほっ！流石はかの相模三浦氏の子孫じやな！さあ、遠慮せんとじやんじやん食えい」

言われずともタダ飯なら幾らでも食わせてもらうよ。しっかし旨いなあここの飯は。というか徳川の爺様はうちの家系の事を知ってるのか？まあ、いいか。今は飯だ飯。1時間程の時間を掛けてたつぷりと食った俺は、膨れた腹を擦りご満悦だ。

「……試合後じゃというのにようもこんなに食べたもんじゃな」

「台本有りとはいえ大した相手ではありませんでしたからなあ」

「それにしてもじゃ。しつかり相手の技を受けたんじやろ？それでこれだけ食べるのは、外だけじゃなく内まで強い証拠じゃ」

猪狩さんの言う通りに今日の相手は大した相手じゃなかった。むしろ気疲れしたから食わなきややつてられないよ。

「ふむ、退屈な相手だったと言うんじやな？」

「飾らずに言えばそうですね」

俺がそう答えると徳川の爺様はニンマリと笑みを浮かべる。ああ……この流れは。

「良意、地下闘技場でやらんか？」

「猪狩さんがいいと言えば」

チラリと猪狩さんに目を向ければニコニコといい笑顔で笑っている。

……なるほど、もう話がついてたわけか。

「いつ出来る？」

「今すぐでも」

「よしっ！決まったら伝えるぞ！」

俺は手の平を上に向けて親指と人差し指で輪つかを作りながら猪狩さんに目を向け

る。すると猪狩さんは指を一本立てた。

ファイトマネーは1億かあ……。徳川の爺様が太っ腹なのは大歓迎だけど、金銭感覚が狂いそうだなあ。



side : 徳川光成

よしっ！良意の奴の言質を取ったぞ！早速ファイターを見繕わねばな！

ルンルン気分で料亭を後にして車に乗り込むと猪狩の奴も乗り込んでくる。

「オーケーをしておいてなんですが、先月組んだばかりだというのにまたですか？」

「試合というには随分と一方的じゃったからなあ。あれじゃむしろ良意はフラストレーションが溜まってしまったじゃろ」

良意の奴は1年程前から地下闘技場で幾度も試合をしておるが、その試合のどれもが苦戦することなく楽勝の二文字で終わってしまっておる。むしろ相手を壊さぬ様に気遣いをさせてしまっておるのは儂の失態じゃ。

「柔よく剛を制すが日本の武術、格闘技の御家芸と言いたいが、それらを許さず圧倒的な

臂力で振じ伏せてしまう。流石は相模三浦氏の子孫よ」

八十五人力の勇士の異名を持つ相模三浦氏最後の当主、その当主の血を継ぐ子孫の良意もまた類い希な身体を持ち主じやった。

儂が良意と会ったのはちょうど一年前か。猪狩が武者修行として中国拳法の雄に弟子入りをさせて、その出先から帰ってきた時じやった。

驚いたわい。僅か一年功夫を積んだだけで『海王』を名乗る事を許されちまったというんじやからな。

その話が本当か確かめたくて地下のファイターと試合を組んだが……結果は技を使わせることも出来ず、ただただ良意に気を使わせただけじやった。

それ以来儂は詫び代わりに何度も良意の試合を組んだが、結果はどの試合も気を使わせ続けるのみ……本気も全力も出させてやる事が出来ずにおる。なんとも情けないことじや。

「あく……あまり気に病まずとも大丈夫かと。良意は腹一杯に飯が食えればそれでいいという奴なんで」

猪狩はそう言うがあれほどの猛者じや。力を振るう機会に飢えておるじやろう。ならばその機会を与えてやるのが儂の使命！

「フッフッフ、待っておれよ良意。儂がとびつきりのファイターを用意してやるから

のう」

「そう言葉を溢すと猪狩は何故か頭を抱えながら大きいため息を吐きおった。社長業で疲れておるのかもしれないな。」

第3話 『婚約者とプロレスラー』

高校への通学途中に携帯に徳川の爺様から連絡があつて、来週の日曜日に試合が決まったそうだ。相手は内緒らしい。まあ、誰が相手でも1億のファイトマネーを貰えるからやるけどね。

「良意おはよ」

「おっ? おはよ」

今挨拶をしたのは俺と同じ年で猪狩さんの末娘である翔子ちゃんだ。顔立ちはお母さん似である。よかつたね。

「デビュー戦残念だったねえ。つて言つところか?」

「知つてるでしょ?」

「まあねえ。セメントだと相手を壊しちゃうし、パパが台本作るのも仕方ない……つてね?」

13歳の時に各種陸上競技の高校生記録を塗り替えた俺が3年間プロレスと中国拳法でガッツリ鍛えた結果、今現在の俺はそれはまあエグい身体能力を得てしまったのだ。

まるで特典で取得経験値倍増でも貰ったかと錯覚する。……俺が貰ったのは健康で丈夫な身体なんだがなあ。

前世の俺は不摂生のせいで糖尿病やらなんやらを患い、健康とはとても言えない人生を送った。

なので転生時に神様に健康で丈夫な身体を貰ったんだが……もしかしたら神様基準の健康で丈夫な身体を貰ってしまったのかもしれないな。

……まあいいか。おかげで稼げるし。30代半ばまでガッツリ稼いで、後は悠々自適に楽しく生きよう。

でもその悠々自適な楽しい生活には翔子ちゃんも含まれてるんだよなあ。

そう思いチラリと目を向けるとニコニコと笑みを浮かべながらこちらを見る翔子ちゃんがいる。可愛いなあ。

実は猪狩さんが根回しをして俺の両親を抱き込んだ結果、俺は14歳の時に翔子ちゃんという婚約者持ちとなったのだ。

そのせいで他の生徒からやつかみを持たれる中学生活と高校生活を送る羽目になっているのだが……まあ翔子ちゃん程のカッコいい系の美少女が婚約者になるのなら、その程度のデメリット等大歓迎というものよ。

「あつ、今度の試合見に行くから」

「どつちの?」

そう問うと翔子ちゃんは人差し指で地面を指す。

……たぶんというか絶対に徳川の爺様の差し金だろう。まあ、いいけどね。

苦笑いをした俺は小腹を満たすために、バッグの中からカロリーブロックを取り出すのだった。



side : 猪狩翔子

良意との馴れ初め? いいわ、聞かせてあげる。

私が良意と初めて会ったのは3年前の13歳の時ね。

その時に初めて私は自分より大きい男の子と出会ったわ。

当時既に身長178cmまで伸びてしまっていた私は、周囲から大女とからかわれることもザラだったんだけど、そんな私を良意はちゃんと女の子扱いしてくれたの。

それで惚れてしまったというところ軽い女と思われるかもしれないけど、惚れてしまったのだから仕方ないでしょ?

だから私は。パパにお願いをして良意を私の婚約者にして貰ったわ。

恋は戦争なの。使えるモノは親でも使うわ。卑怯とは言わないわよね？

そうして良意と婚約者になったのも束の間、あのクソ親父は武者修行と称して良意を中国に送り出しやがったわ。

何度あの顎にドロップキックをかましてやろうかと思った事か……。コホン、ごめん遊ばせ。

1年経って帰ってきた良意は見違える程に成長していたわ。優しい顔立ちはそのままでけど、なんというか……。そう、雄としての純度が増したとも言うのかしらね。惚れ直したわ。

そのせいか中学最後の1年はメス猫共が寄ってくることに寄ってくる……。お呼びじゃ無いのよあんたたちは！コホン、またまたごめん遊ばせ。

そのメス猫共の中には私に興味を持って近付いてきたのもいたんだけどさあ……。私はノーマルなの！あんな優秀な婚約者がいて女に興味が出るわけないでしょうが！……コホン、何度もごめん遊ばせ。

まあそんな感じで外野はうるさいけど、私は良意と仲良くよろしくやってるわ。

え？結婚式？もうっ！気が早いってば！でもそっかあ……。結婚がいつか気になるぐらいにお似合いに見えちゃうのかあ。

ねえ、名刺くれない？よかったらパパに紹介してあげるわ。えっ？もうパパの名刺
持ってるの？やるじゃない。優秀な記者つてのは貴方の様な人の事かもね。

それじゃこの辺でいいかしら？この後デートなの。もちろん良意とね。それじゃ！

第4話『超実戦柔術家とプロレスラー』

地下闘技場での試合まで残り2時間半程、俺は今飯を食ってエネルギーの補給をしていた。

おじやを始めとした消化に良い物を腹にタツプリ詰め込むと横になって休憩。そして試合まで残り1時間程となったところでスパッツタイプの試合用パンツに着替えてアツプ開始。しつかりと身体を暖める。

「三浦選手、準備をお願いします！」

スタツフさんと呼ばれて入場口に移動。さてさて、誰が相手なのか？

実況の選手紹介によるとどうやら相手は本部以蔵という人で超実戦柔術家との事。柔術家ねえ……ブラジルの柔術とどう違うんだろ？

まあ、受けてみればわかるか。

試合場に入り先ずはパフォーマンス。こういうファンサービスはプロレスラーとして当たり前だからな。

太鼓が鳴って試合開始。おつといきなり金的か。流石は超実戦柔術家といったところかな？

けど残念。武者修行で中国に行った時に師父から金的対策を教わっているんだよね。腹筋を操作して鞆丸を引き上げるとそのまま金的を受ける。するとダメージの無い俺を見た本部さんは驚いた。

「その年でコツカケを使いよるかあ……」

水月、鼻下に喉等の正中線にある急所に次々と打撃を仕掛けてくるがそれらも全部受けていく。おっと、目突きだけは勘弁ね。

うゝん……ここまで打撃を受けてみて思ったけど、これまでに戦った打撃系格闘技の選手と比べて本部さんの打撃は軽いなあ。もしかして打撃は不得手で関節技とかの方が得意なのかな？

というわけで本部さんに見せ場をあげるために右腕を差し出す。すると……。

「馬鹿がつー！」

そう言いながら仕掛けてきた本部さんの脇固めをわざと受け、そのまま倒されて地面に腹這いになる。

さて、ここからは俺の見せ場だ。

空いている左手を地面につくと、そのまま片腕で倒立をする。もちろん本部さんも一緒に持ち上げてな。

そして悠々と脇固めから逃れた俺は極められていた右腕をクルクルと回す。

一見すると腕の調子を確かめているかの様に見えるだろうが、プロレスファンならわかる次の行動へのパフォーマンスだ。気付いてくれよ、本部さん。

腕をクルクルと回しながらゆっくりと近付いていき、間合いに入ったなら踏み込みラリアットをぶちこむ。うん、ちゃんとガードしてくれた。よかったよかった。

ラリアットをガードした本部さんだがクルクルと縦に1回転半回って地面に落ちる。気絶はしてないみたいだがどうやら脳震盪をおこしたみたいで、フラフラと立ち上がってくる。

後ろから近付き腹に手を回しクラッチ。そして……。

「ジャーマンスープレックス、いきます」

そう小声で呟くと本部さんの身体をぶっこ抜いてブリッジ。ジャーマンスープレックスを決めた。

うん、流石は柔術家。ちゃんと受け身を取ってくれたな。でも気絶しちゃったみたいだからここまで。

ブリッジの状態から腹筋を使って起き上がる。そして観客の方に向き直ると……。

「いくぞー！ ツー！」

恩人である猪狩さんの勝利パフォーマンスを決めて会場を盛り上げたのだった。

そういえば腕を取られた時に本部さんの手にタコがあるのを感じただけ……も

しかして武器術が一番得意だったのかな？



side：本部以蔵

あん？三浦との試合の事が聞きたい？あそこでの試合は表沙汰に出来んのに、おたくも酔狂な事だな。じゃあ、コーヒーの一杯でも奢ってくれや。

そうだな……先ずは最初の金的だな。あれを決めた瞬間に驚いた。古い武術家ならいざ知らず、今時の奴でコツカケを出来るなんざあ思いもしなかったからな。

その後はあれだ、各所の急所への打撃。あれをやってる時に俺の頭には、ぶつといタイヤを巻き付けた樹齡ウン百年の大樹が浮かび上がってたぜ。

こりや打撃じゃ話にならんと思ってた時に腕を差し出されりや、そりや『馬鹿がつ！』とも言っちゃまうだろ？実際に地面に倒して完璧に決めてたんだ。勝負あつた。見栄を張つて馬鹿を見たなと思つたさ。

そしたらあいつは俺を乗つけたまま片手で逆立ちをしゃがった。あんなことされちゃあどうにもならん。正直絞め落とすのも無理だと感じたぜ。

それで三浦の奴が腕をクルクル回し始めやがっただろ？まあ、俺もそれなりにプロレスを知ってるからな。嘘だろと思つたさ。けど、嘘じゃなかったんだよなあ……。

まるで衝突事故さ。車どころかトラックにでもぶつかられたんじゃねえかと思つたぜ。

その後は正直に言つて頭がクラクラしてて勝負にもなりやしない状態だった。けど、立ち上がつちまうんだよなあ……。武術家や格闘家つてのは因果なものさ。

最後、後ろから組みつかれただろ？あん時に三浦は『ジャーマンスープレックス、いきます』つて言いやがったんだぜ？そんな時に思つたんだ。ああ、こいつは間違いなくプロレスラーだわつてな。

そつからは気絶しちまつて覚えてねえ。まあ、こうしてコルセット巻いて全治一カ月のムチウチ程度で済んだんだ。過去の俺によく稽古を積んだと誉めてやりてえところだな。

まあ、三浦との試合の話はこんなところか。それじゃコーヒーごつそさん。間違つても記事にすんなよ？徳川翁に目をつけられちまうからな。

第5話 『医者とプロレスラー』

「大丈夫、いたって健康ですよ」

去年からお世話になっているかかりつけ医の鎬紅葉先生の言葉を聞いて内心安堵の息を吐く。

「ありがとうございます。いつも通りに診断書をお願いします」

「はい、わかりました。どうぞお大事に」

診察室を退室した俺は支払い窓口前に座ると改めて安堵の息を吐く。

これは前世の不健康だった俺の経験則とも言えるのだが『痛くない』病気や怪我じゃない、『痛くない』病気や怪我が治った』わけじゃないのだ。

例えばスポーツ選手がちよつとした怪我で休んでいたが、痛みが無くなったから練習を再開した結果より怪我を悪化させてしまう……なんて事が起こる。

なので素人が怪我や病気を簡単に判断してはいけないのだ。

しかし鎬先生は若いのに凄い優秀だな。身体もしっかり鍛え込んでるみたいだから、スポーツや格闘技に対する理解もしてくれる。いい主治医に巡り会えたもんだよ。

こんな風に健康を気にしている俺がプロレスをやってるのはどうなんだと思うが、俺

が叩き出すエンゲル係数を考えると一般的なサラリーマンの給料じゃ到底無理なんだ。

他にも身体能力的にコンタクトスポーツは事故が起きそうだから無理。プロレス以外の格闘技はありっちゃありだけど……多分プロレスほど楽しくはないだろうなあ。

「三浦さ〜ん、三浦良意さ〜ん」

「は〜い」

さて、領収書と診断書をちゃんと貰わないとな。面倒だけど猪狩さんが経費で落としてくれるって言ってるしね。



side : 鎬紅葉

「おっ?それは例の少年のカルテか?」

「……藻木か」

束の間の休憩時間に三浦君のカルテを見ていると、不意に友人の藻木研一郎（もぎけんいちろう）が話しかけてきた。

「う〜ん、何度見てもとんでもない骨密度に筋密度の数値だな。脂の乗りきった超一流

のアスリートならまだわかるけど、これでまだ成長途上の若者だってんだから人体は不思議なものだよ」

たしかにこれほどの筋密度と骨密度も驚きだが、それ以上に私が驚いているのは筋繊維のバランスだ。私が思い描いていた理想的な肉体……その肉体の筋繊維バランスに酷似しているのだ。

理想的な筋繊維バランスを保持しており、その上で私の想定を超える筋密度や骨密度に身長までをも持つている。しかも身長に至っては成長途上なのだ。そんな彼は陳腐な表現となってしまうが超人と言えるだろう。

「そういうえば鎬、あれはどうすんだ？」

「あれとは？」

「あれだよあれ、『理想的な肉体は医学的見地に基づいた科学的トレーニングで造れる』ってやつ」

私は格闘家や武術家が我等が最も人体に精通していると我が物顔でいるのが我慢ならなかった。

故に藻木の言う通りに計画的にトレーニングを積んで肉体が完成した暁には、彼等の鼻を明かすつもりだったのだ。……『彼』に出会うまでは。

「……それは白紙だな」

「えっ？マジで？理由は？」

私は手にしていたカルテを軽く振ってみせる。

「なるほどなあ、天才には敵わんかあ」

「大抵の者等には勝てる肉体は造れるだろう。だが当初の目的は果たせず『凡人でも辿り着ける領域の理想的な肉体は』となくなってしまっただろうな」

やる前から敗北を認める。我が人生で初めての経験。だが思いの外スッキリした心持ちなのが不思議だ。

「そっかあ……じゃあトレーニングは止めちゃうのか？」

「いや、続ける。トレーニングを通じて人体への理解を深めるのは、次なる私の目的に沿っているからな」

「次の目的イ？」

首を傾げる藻木に私は不敵に笑って答える。

「例えば天性の肉体を持つていても辿り着けない、我々だけが辿り着ける到達点……世界一の名医に、な」

そう言うと藻木は大笑いした。

「おいおい、そんなに笑うことはないだろう？」

「あっはっはっはっ！いや、すまんすまん……ああ、安心した」

「安心？」

「ああ、研修医時代からお前は手技を完璧にこなしてたが、患者を見ている様には見えなかった。けどここ最近のお前はちゃんと患者と向き合っている様に見えるんだ。だから安心したって言ったんだよ」

確かに藻木の言う通りに過去の私は患者を……他人を見ようとはしていなかった。それは言い訳のしようもない事実だ。

「心配を掛けてしまったかな？」

「まあな。けど、もう大丈夫なんだろう？」

「ああ」

差し出された藻木の手を自然に取り握手を交わす。この時、私は本当の意味で藻木と友人になれた気がした。

「藻木、すまないが手伝ってくれ。1週間後の手術について検討しなおしたい」

「えっと、確か足を切り落とす予定だったやつか？」

「ああ、切り落とさずに残せないかどうかをな」

術後の肉体の経過を考えれば切り落とすのがベスト……以前の私はそう考えていたが、今の私は患者の心情を考えて残す手術にしたいと思っっている。

我ながら変わったと思うが……悪くないと思える変化だ。

第6話『空手家とプロレスラー その1』

本部さんとの試合後も徳川の爺様に何度も試合を組まれ、気が付けば2年の月日が経ち俺は18歳になっていた。

学生生活も今年で終わりであって、俺は本業のプロレスの興行以外は悠々自適な学生生活を送りたいと思っていたのだが、今日も今日とて徳川の爺様からのお呼び出しだ。

「おう、チャンピオン。よう来たよう来た」

ご機嫌な徳川の爺様が言う通りに今の俺はチャンピオンなのだが、徳川の爺様が言うのは俺が所属するプロレス団体のチャンピオンの事ではなく、地下闘技場のチャンピオンの事だ。

俺は知らなかったのだが、数々の地下闘技場での試合の中でどうも相手に現役の地下闘技場チャンピオンもいたらしい。知らぬ間に地下闘技場の現役チャンピオンに勝つてしまっていたわけだな。

俺に負けた地下闘技場のチャンピオンなんだが……『たとえエキジビションとはいえど負けたからには最強とは言えぬ』って徳川の爺様に言われてチャンピオンの座から下ろされたらしい。

それで俺が地下闘技場の暫定チャンピオンに指名されて、知らぬ間に地下闘技場チャンピオンの座が欲しい人達と次々と戦っていたわけだ。

そして今現在、地下闘技場のAランクのファイターを総ナメしちゃった俺は正式に地下闘技場のチャンピオンとなってしまったというわけだ。

ちなみに本業の興行の方はともかく地下の方では負けなしだ。

「徳川の爺様、何度も言ってるけど俺はファイトマネー無しじゃやらないよ」
「わかつとるわかつとる」

そういえば基本的に地下闘技場のファイターはファイトマネーが無いらしい。

それじゃなんで地下闘技場で戦うのかというと、本当の意味で最強の称号が欲しいらしいのだ。

けどそれじゃ生活してけないだろうと思ったんだが、ファイトマネー以外のところで色々と優遇しているそうだ。

例えば医療機関やトレーニング施設なんだが、徳川の爺様の息がかかった所なら実質無料で利用出来るらしいし、日々の食費も援助や後援という名目である程度出しているらしい。

そこまでするならファイトマネーを出したらと思っただが徳川の爺様は、『小金を持つとファイター達の最強になりたいという想い……その純度が薄れる』のが嫌でフア

イトマネーは出さないんだとか。

まあ地下闘技場のファイターが引退したら、そのファイターの実績や功績を称えてそれなりにまとまった金を渡すらしいけどね。

「それで……次の相手は？」

「おっ？知りたくないか？うゝんでもなゝ……」

うわあ……。こうなると適当に徳川の爺様に合わせるしかないんだけど、それがまた面倒くさいのだ。

しばらく適当に話を合わせていると不意に徳川の爺様が笑みを浮かべる。
すると……。

「この者が御主の次の対戦相手、虎殺しにして生ける武神……愚地独歩（おろち どつぼ）じゃ」

どこかで話を聞いていたのかスキンヘッドのゴツイ人が現れたのだった。



side : 徳川光成

良意が去ると独歩と二人茶を飲んでゆるりと過ごす。うむ、こういう時間も良いものじゃ。

「独歩、どうじゃった？」

「デカイですな」

良意を見た者達の第一声は揃ってデカイになる事が多い。まあ、そりやそうなるじゃろうな。なんせ今の良意は2年前より更に大きくなっておる。身長217cm、体重140kgは日本人はおろか世界的に見ても規格外の大きさじゃ。

「それにしてもいきなり連絡があつて驚いたぞ。しかも良意を名指して指名するなど」
「……少し思うところがありましてな」

付き合いが長いからこそわかるが、どうも何かを腹に抱えておる様子。あるいは顔の傷に関わる……いや、良意の歳を考えればそれはないか。

であれば……はて？

疑問に答えが出ぬままに独歩は去っていった。

「まあ、二人の試合を見ればわかるやもしれんな。さあて良意が地下に来てから最高のカードじゃ。楽しまんとおう」



side : 愚地独歩

いつからだだったっけなあ？正拳がこうじゃねえと思う様になったのは。

地下闘技場でチャンピオンになってからか？オーガに不覚を取ってからか？とんと思い出せねえが、俺の中で何かが確かに言つてきやがるんだ。正拳はこうじゃねえつてな。

三浦との試合を明日に控え床に就く前に拳を握つてみるが、感じるのはこうじゃねえという違和感のみ。

日々の鍛練で答えに近付いている感覚はある。されど未だに辿り着けず。正拳は完成しない。

俺も既に齢51……いつまで現役でいられるか……。そんな思いを抱く俺が見付けたのが三浦良意だった。

キツカケは神心会会員の一人の言葉だった。若いのにすげえプロレスラーがいる。けどそいつはチケットを取ったはいいが仕事で見に行けねえときて俺にチケットを譲った。

家族三人で見に行つてみて一見……三浦良意を目にした俺は全身に鳥肌が立った。

範馬勇一郎……あのオーガの父親であるかの御仁を初めて目にした時と同じ衝撃を三浦に感じたんだ。

三浦の試合は台本有りのもんだったが……奴の身体を見りや納得。そりや台本が無きや相手がぶつ壊れるつてな。

試合を見終わり家に帰った俺は直ぐ御老公に連絡を取った。幸いにもまだ俺は地下のファイターとして登録されていたらしく、三浦との試合を組むのに支障は無かった。そうして今日に至る。

気が付けば拳を握ったまま武者震いをしていた。

(こんなに気持ち昂るのはいつ以来だろうな?)

武者震いを止める為にギユツと拳を握り込むと、布団に潜り目を閉じたのだった。

第7話『空手家とプロレスラー その2』

愚地独歩さんとの試合の日がやって来た。今日はわざわざ猪狩さんが関係者として俺の控え室まで来ているんだが、どうも独歩さんはそれだけやばい人らしい。

なんでも独歩さんはガチで虎殺しをやったんだとか。……いや、まあ、正直に言うとも俺も出来ると思う。それこそ虎殺しどころかホツキョクグマ殺しでもやれるかも。どこその団体がうるさそうだからやらないけどね。

「良意、今日は無理にプロレスにこだわるんじゃないぞ」

試合前のエネルギー補給をしていたら不意に猪狩さんがそんな事を言ってきた。

「珍しいですね猪狩さんがそんなことを言うなんて」

「余人なら壊さねえ様に手心を加える意味でもプロレスをさせてきたが……愚地独歩は別だ。奴は本物の空手家だからなあ」

徳川の爺様の屋敷で会った時にそれはわかった。拳を始めとして各部位の部位鍛練を怠っていないのも直ぐにわかった。もしかしたら打岩も出来るかもしれない。

そして猪狩さんがこう言う程に危険な人なんだろう。けど俺はプロレスラーだ。だからこそ出来る限りプロレス的に戦いたい。

真剣勝負を……本気の戦闘を否定するつもりはない。だが見ている人達を楽しませるといふ一点においてはプロレスに勝る格闘技は無いと思っている。

何よりも俺自身が楽しいんだ。プロレスが。

「まあ、なんだ。そんなわけだから、ファイトマネー分は楽しんでこいや」

やれやれ、プロレスにこだわるなつて言ったのに楽しんでこいか……この人に拾われて良かったな。

さてエネルギー補給も終わったし、ちよつと仮眠したらアップを始めるかなつと。

そうしてやって来た試合時間、地下闘技場に入場してファンサービスのパフォーマンスをしていると不意に背中が重くなり、首に何かが巻き付いてきた。どうやら愚地さんが試合開始の合図の前に仕掛けてきたようだ。

いいね、とてもプロレス的じゃないか♪

けど愚地さん、チョークスリーパーは良い選択とは言えないなあ。

打撃、投げ、絞め、極め、これらあらゆる攻撃を『受ける』のがプロレスラーなんだ。だからね……打撃の人の絞めで落ちるほどプロレスラーの首は柔じゃないよ。愚地さん。

俺は何事も無かった様に散歩でもするかの如く闘技場の中央に歩いていく。そして中央に辿り着くと後頭部に衝撃が走った。おそらく頭突きでもされたんだろう。

振り返ると愚地さんが足刀での横蹴りを喉に放ってくる。容赦ないねえ。もちろんこれも受ける。するとこの一撃を皮切りに愚地さんのラッシュが始まった。

下段蹴り、腹への足先蹴り、胸や腹への正拳突き連打に上段回し蹴りと全て受ける。

うん、痛いな。地下闘技場で戦った人達の中でも断トツで痛い打撃だ。けど師父程じゃない。あの人の『消力』を使った打撃はシャレにならないからなあ。

そんな事を思いながら受けていると、ふと違和感を感じる。なんだろ？

ジツと愚地さんの打撃を観察しているとその違和感がわかった。

なるほど、『正拳』が合っていないんだ。

その事を指摘するか少し迷った。俺みたいな若造が言う事じゃないかなって。

けどそれもプロレス的かなと思うので言ってみようと思う。

ラッシュが終わり一息つくために愚地さんが離れたのを見計らって、俺は口を開いたのだった。



side : 愚地独歩

ここまで打撃をかまして倒せないどころか大したダメージを与えられないのは初めての経験だ。屈辱どころかテメエの未熟を恥じるばかりだぜ。

そう思いながら一息入れるために離れると不意に三浦の奴が口を開く。

「惜しい、惜しいなあ……拳が合っていない」

「あん？」

いきなり喋り始めたかと思えば拳が合つてねえだあ？

「師曰く、拳は握るものではなく造るもの……だそうですよ？」

その場で右手を上げた三浦が話し出す。

「正拳、平拳、開手拳と打撃の用途に応じて色々な形がありますが、本当に自分に合っている拳は一つ。それを見つけられないと本当の脱力には辿り着けない。もしかしたら、思いもよらない拳の形が愚地さんには合っているかもしれないね」

腰に手を当ててニツと笑つた三浦がまた話し出す。

「まあ、そんなことをこんな若造に言われたって納得いかないでしょうからここは一つ、本当の脱力が出来た拳つてやつを体験してもらいましょうか」

そう言うのと三浦は試合が始まってから初めて構えを取つた。

三体式……中国拳法の構えの一つだ。

スツと歩みを進めて距離を詰めてくる。

悪いが俺は空手家だ。プロレスラーの様にわざわざ食らってやらねえよ。

前羽の構えを取り完全に防御の準備は整っていた。

だが……。

「ガハツ!」

気が付けば腹に強烈な衝撃を感じて俺は地面に倒れた。

倒れる前に目にした三浦の状態から察するに俺が食らったのは崩拳……それも武術の世界じゃ名高い半歩崩拳だ。

「こんな感じに余計な力みが抜けてしつかり脱力が出来れば起こりを消せます。……便利でしょ?」

便利なんてもんじゃねえ。三浦の野郎、身体の起こりどころか意識の起こりまで消しやがった。

俺も長年の鍛練で身体の起こりや意識の起こりを可能な限り消したが、それでも打撃を外せないってレベル。だが三浦のは食らってからわかるレベルだ。俺が相手の起こりの意識を読むことに関して未熟だったとしても見事としか言いようがねえぜ。

たった一発で足が震える程のダメージを負っちゃまった俺だが歯を食い縛って立ち上がる。そんな俺の頭ん中には色々な思いが巡っちやいるが、そんな中でも一等強い思いは『もつと見せろ!』だ。

三浦が見せたモノは今の俺に足りないモノ。俺がもつと強くなるために必要なモノなんだ。こんなところで寝てちやもつたいねえだろ！

そう思つてやつとの事で立ち上がつてみりや、三浦の奴はこれ見よがしに右腕をグルグルと回してやがる。

おいおい、あんなモンを見せておいてプロレスに戻るたあつれねえじゃねえか。

まあいい。今日のところは勘弁してやるよ。だからよ三浦。

俺がテメエに合つた拳を見つけたそんな時には……また戦ろうぜ。

走り出した三浦が放つラリアットを受けた俺は、笑みを浮かべたまま気を失つたのだつた。

第8話『少年とプロレスラー』

愚地さんとの試合が終わりいつも通りに鎬先生の診察を受けてOKを貰った翌日、ジムに顔を出すとちよつとした珍客の来訪があった。その珍客というのが……。

「ねえ、ここで一番強い人とやらせてよ」

この弱冠13歳の少年の範馬刃牙君だ。

「おいおい坊や、ここがどこかわかってるのかい？」

「知ってるよ、プロレスのジムだろ？」

制服の隙間からチラリと見える身体は年齢不相応という程に鍛えられているのがわかるが、いわゆる道場破りが出来るかと言われると疑問符が浮かび上がるな。

……うん、下手に先輩方を怒らせて本気を出されちゃうぐらいなら俺が相手をするか。

「えつと、刃牙君でいいんだよね？よかつたら俺が相手をするよ」

「おいおい三浦、お前じゃいじめになつちまうだろ」

「大丈夫ですよ、慣れてますから」

プロレスラーは台本があるからなのか他の格闘技と比べて舐められやすい事もある。

だからこそ道場破りに来た奴等にはしつかりとわからせないといけない。プロレスラーは強いのだと。

実はこれまでも地元の喧嘩自慢の悪ガキ共がうちのジムに道場破りに来た事が幾度もあるんだが、俺がいる時はだいたい俺が相手をするようにしている。

先輩方じゃたまに可愛がり過ぎちやうからなあ……。

というわけで今回も俺が相手をしようと思う。

「それじゃ、始めようか」

刃牙君と一緒にリングに上がってそう言うところれ見よがしにジャージの上を脱ぎ始める。すると……。

「ツシヤアー！」

先手必勝とばかりに刃牙君は金的蹴りをしてきた。

「なっ!? な、なんで……?」

驚く刃牙君にニツと笑って答える。

「そりゃ俺がプロレスラーだからさ。金的だつて受け慣れてるよ」

そう言うジムにいた先輩方が笑って囁し立て始める。

「坊や安心しな! うちでも金的が効かねえのは三浦ぐらいだ!」

「そうそう! 運が悪かっただけさ!」

そんな先輩方の言葉に気を取り直したのか構えを取り正面から攻めてくる。

ローキック、後ろ蹴り、左右のパンチ連打と年齢の割りにはいいラッシュだ。うん、将来有望なファイターだね。

さて、どうしようかな？

刃牙君の目を見るとただの興味本位でここに来たわけじゃなさそうな気がする。ならプロレスラーが強いってわからせるんじゃないかと、それとなく技術を教えてあげるのも悪くないかな？

そう考えた俺は刃牙君から受けた攻撃を一つ一つ返していく。

ローキック、後ろ蹴り、左右のパンチとこういうやり方もあるよと教える様に打つ。

最初は痛みに顔を歪めたり同じ攻撃を返される事が癩に触ったのか顔に青筋を浮かべてたけど、少ししてこちらの意図が伝わったのか目を輝かせて色々やってくる様になった。

いや、うん、刃牙君って天才だね。俺がやって見せた攻撃の身体操作を数回試行錯誤するだけでだいたいモノにしてしまっているんだもん。

そんな刃牙君とのやり取りも刃牙君の体力的限界が見えて終わりが近づく。刃牙君がパンチの打ち終わりに足が纏れて俺に身体を預ける形になった。

俺はクラッチして刃牙君に告げる。

「パワーボム、行くよ。受け身しっかり」

慌てた様に両手で後頭部を保護した刃牙君を見てぶっこ抜き彼の年齢を考えて背中から落とす様に投げると、体力的な限界を迎えていたのもあってか刃牙君が気絶して彼の道場破りは終わった。

しばらくして刃牙君が目を覚ます。目を覚ました刃牙君に……。

「よし刃牙君、飯に行こっか。もちろん俺の奢りでね。あつ、その前に病院に行こう。念のために」

そう告げると刃牙君は驚いて目を白黒させたのだった。



side：範馬刃牙

三浦さんに病院に連れていかれて鑄という先生に色々と検査をされた後、今度は随分と高そうな料亭の個室に連れて来られた。

プロレスラーって金持ってんだなあ。

「さあ食った食った。食わないと強くなれないぞ」

「えっと……はい、いただきます」

俺が所狭しとテーブルに並べられた料理に手を付けると三浦さんもワシヤワシヤと勢い良く、けど綺麗に食べ始める。

「あつ、すみません、追加お願いします」

「はい」

信じられない程に食う三浦さんに驚くが、これだけ食えなきやダメなんだと腹を括り料理を腹に詰め込んでいく。

それにしても店の人も慣れているのか追加の料理をじゃんじゃん持ってくるな。

俺は限界を迎えたが三浦さんはまだ食い続けている。三浦さんが最強のプロレスラーと言われるのもわかる食いつぶりだ。

しばらくして食い終わった三浦さんが不意に話し掛けてくる。

「それで、ただの興味本位で道場破りに来たわけじゃなさそうだけど……聞いてもいいかい？」

技術を教えてもらい飯まで奢ってもらったのもあつて俺は三浦さんに色々と話した。

「うーん……なんともまあ、複雑な家庭事情だねえ」

頭を搔きながら困った様に苦笑いをする三浦さんに俺も苦笑いをする。

「……まあ、色々と鬱憤がたまったらまたジムに来なよ。身体を動かせば気も晴れるだ

ろうからさ」

そう言う三浦さんに俺は礼を言つて頭を下げた。

……もしかしたらこういう風に誰かに素直に頭を下げたのは初めてかもしれない。

どこか気持ち晴れた俺は気分良く走つて家に帰つたのだつた。

でも、この時の俺は失念していた。

あの『親父』が三浦さん程の人を見逃す筈がないと……。

第9話『少年の父と軍人とプロレスラー その1』

刃牙君を見送ると栗谷川さんという男性が現れて俺に頭を下げてきた。

「御家族以外の方にあれほど坊っちゃん心が心を許されたのは初めてです。お礼を申し上げます。些少ですが、どうかお納めください」

そう言つて茶封筒を差し出されたので受け取ると、栗谷川さんは去つていった。

茶封筒の中を見ると諭吉さんの帯封がいらつしやられる。

「……もしかしたら聞いた以上に複雑な家庭事情なのかもなあ。頑張れよ、刃牙君。俺でよけりや力になるからさ」

数日後、学校も興行も休みで地下の試合も無いとあつて俺は翔子ちゃんとデートをするべく、待ち合わせ場所に向かつて街中を歩いていった。

すると不意にゴツイジープが横に止まり、これまたゴツイ壮年の男性がジープから降りてきた。

「ゲリー・ストライダム大佐だ。ミスター三浦、すまないが一緒に来て欲しい」

大佐とか言つてるから軍人さんか？けどそんなことを言われてもなあ。

「すみませんがこれから婚約者とデートなんですけど」

そう言うのと数日前に見た覚えがある茶封筒を差し出される。中を見ると1000ドル紙幣の帯封がいらつしやられた。

「もしもし、翔子ちゃん？ごめん、急用が入っちゃったから今日のデートはキャンセルでお願い。もちろん後日に埋め合わせはするからさ」

「えっ？ああ、うん……翔子ちゃん！好きだー！愛してる……満足いただけたようになによりだよ。それじゃ、またね」

翔子ちゃんに携帯で連絡を入れ終わるとストライダムさんがニヤニヤとしている。

「どうやら三浦は彼女の尻に敷かれてるようだな」

「否定はしませんよ」

「いやいや、男と女の仲はそのぐらいでちょうどいいのさ。私のワイフも外では私を立ててくれるが、家ではすっかり私が尻に敷かれてしまっていてね。おかげで結婚してからこれまで夫婦仲は良好だよ」

そう言つてウイנקをするストライダムさんに招かれジープに乗り込む。それからしばらく雑談をしながら過ごしていると横須賀の米軍基地に到着した。

「三浦、グッドラック」

ジープを降りると滑走路……なのかな？米軍基地の敷地のど真ん中に上下黒の服にカンフーシューズを履いた男性がいる。

とんでもない存在感だ。見ただけで鳥肌が立つ様な……そう、まるで師父の様な存在感だ。

「三浦良意だな？」

「はい、そうです。貴方は？」

「範馬勇次郎だ」

「範馬？もしかして……。」

「刃牙君のお父さんですか？何の用……って、問うのは野暮ですかね」

そう言う範馬さんは散歩でもするかの様にこちらに歩いて近付いてくると踵落としを放ってきた。もちろん受ける。

ジャブより速い範馬さんの踵落としはピンポイントで俺の顎を蹴り抜く。

うん、痛い。愚地さんと同等かそれ以上だ。

けど愚地さんと違うところがある。それは……範馬さんは蹴りを完全に自分のモノにしているという事だ。

だから余計な力みが無く起こりが察知しにくいため、彼の踵落としがジャブより速く感じる。いや、実際にそこいらのボクサーのジャブよりも速いんだけどね。

踵落としを受けて平然としている俺を見て範馬さんが口角を引き上げる。

「今日は最高の一日になりそうだ」

そう言う範馬さんの顔に蹴りを返した。

プロレスは相手の技を全て受けきるんだが時には技の応酬をする事もある。例えばリング中央で逆水平チョップの応酬をしたり、ラリアットの応酬をしたりだ。

俺が範馬さんに蹴りを返したのはプロレスラーの勘というか感覚で、範馬さんが応酬を望んでいると感じたからだ。

範馬さんがパンチを顔面に放ってきたので受けて殴り返す。

受けて殴り返す。受けて蹴り返す。

そんなやり取りの中で俺は内心で首を傾げていた。

(なんで範馬さんにシンパシーを感じてるんだろ?)

殴られて殴り返す。蹴られて蹴り返す。そんな応酬を続けている間に考えているとふと答えが浮かんだ。

(ああ、そうか……範馬さんは『プロレスと出会う前の俺』なんだ)

1万ドル分は付き合おうと考えていたが方針変更。今日は範馬さんにしつかりと付き合う。



side:ゲリー・ストライダム

殴っては殴り返されと西部劇にでも出てくる様な攻防をしている勇次郎と三浦だが、その実は攻防等という生優しいものじゃない。常人ならば確実に一撃でKOされる威力の攻撃を交わし合っている光景は命のやり取りをする戦闘としか表現が出来ないクレイジーなものだ。

5分程続いた殴り合いが不意に止まる。

「暖まったか？」

「はい、お待たせしました」

勇次郎ならまだわかるが三浦までだと？

先ほどまでのやり取りがウォームアップに過ぎなかった事に驚いていると、三浦がパーカーとインナーを脱いで上半身を顕にする。

そして三浦が大きく一呼吸をしたと思ったその後、目の錯覚なのか彼の身体が一回り大きくなった様な気がした。

「吐納法か」

「師父が言うには、意識してやらなきゃ出来ない俺はまだ未熟らしいですけどね」
察するに三浦は呼吸を用いてパンプアップをした様だ。最早驚きで声が出ない。

三浦に続く様に今度は勇次郎が上着を脱いだ。そして……。

「カアツ！」

一声上げると彼の背中に鬼の貌が現れた。

「凄いな……まあ、それはともかく続きを始めますか」

三浦の言葉を皮切りに二人の戦いが再開された。

勇次郎が打撃し三浦が打撃をり返す。

言葉にすればそれだけだが、二人の打撃が放つ暴威に私は無意識に数歩下がってしまった。

5分か10分か、あるいは30分か1時間かもわからない濃密な時間が過ぎるとまたもや不意に二人の動きが止まる。

「どつちからだ？」

「俺はプロレスラーですから」

そんな一言だけの会話で二人は通じ合うのか、勇次郎の背中の鬼が哭いた。

「ツシヤア来い！」

まさか……三浦はあの一撃を受け止めつもりか!?

私の予想通りに勇次郎は最大の一撃を放った。そして三浦はその一撃を胸板で受け止める。

だが……。

「……いつてえー!?!」

訪れた結果は私の予想を覆すものだった。

あの一撃を受けて生きているどころか気を失ってすらいない。私は幻を見ているのか?
か?

「クスクスクス……ハーツハツハツハツ!」

勇次郎が心の底から楽しそうに笑っている。最早私には何が起こっているのか理解出来ない。

だが、そんな私にも一つだけわかる事がある。

それは先ほどまで充満していた空間を歪ませる程の濃密な闘気が消え失せた事で、二人の戦いは終わったのだという事だ。

第10話 『少年の父と軍人とプロレスラー その2』

範馬さんとの喧嘩が終わった後、範馬さんと夕食の約束をしてストライダムさんに送ってもらい一度家に帰った。

「さて、先ずはシャワーを浴びたら病院かな」

病院で鎬先生に診察をして貰うと胸骨が折れていた事が判明。道理で痛みがあるわけだよ。もつと鍛えなくちゃ。

診断書と領収書を持つて猪狩さんの所に顔を出すと呆れた顔をされる。

「まあなんだ、いい機会だから興行は卒業まで休んじまえ」

そんな感じで高校卒業まで興行を休む事に。話を聞いてみると現役の学生である俺に興行をさせる事に対するお気持ちを表明する人がそれなりにいるんだとか。

「余計なお世話ですね」

「出る杭は打たれるってな。まだ若いお前が名を売ると、それが気に食わない輩はどうしたって出てきちゃう。まあ、諸々の対応は俺に任せて残った学生生活を楽しんでこいや」

そんなやり取りが終わって家に戻るとストライダムさんが迎えに来ていた。何度も

お疲れ様です。

「三浦、用事は終わったかな？」

「はい」

「それじゃ行くか。勇次郎が待っている」

そうして連れて来られたのは都内の高級ホテルの一つだった。

ストライダムさんに案内されると広い部屋の中央にテーブルが一つだけあり、そこで範馬さんが待っていた。

「来たか」

「はい、お待たせしました範馬さん」

「勇次郎だ」

彼がそう言うのとストライダムさんが驚いた顔をする。

「じゃあ勇次郎さんで。俺も良意でいいですよ。今日はご馳走になります」

「ふん……」

ベテランの雰囲気を持つホテルマンが機を見て次々と料理を運び込んでくる。料理はいわゆるジビエ料理というやつだ。

「美味しいですね」

「家畜には決して出せない野生の味だ」

しばらく料理に舌鼓を打ち時間が過ぎていく。そして一通り平らげた後、勇次郎さんに話し掛けた。

「スツキリしましたか」

「ああ」

「それはよかった。興行があつたりするんでいつでもはいきませんが、たまにでよければ喧嘩に付き合いますんで。まあ高校卒業まで興行を休む事になったんでしばらくは暇なんですけどね」

そう言うのと勇次郎さんはニツと笑ったがストライダムさんは驚いて口を開いた。

「待ってくれ三浦。君は先程の戦闘を喧嘩だというのか？」

「はい、そうですけど？」

そう答えるとストライダムさんは口を半開きにして首を横に振る。

うくん……戦闘だなんて大袈裟だなあ。



side:ゲリー・ストライダム

信じられない言葉を聞き思わず声を上げてしまった。あれほどの激しい戦いが戦闘ではなく喧嘩だと？信じられん。

「互いに殺意もなく防御もしない戦い……そんなものが戦闘である筈もない」

勇次郎にそう言われ思い返してみれば、確かに戦場特有のあの空気は微塵も感じられなかった覚えがある。

「で、ではさっきの喧嘩はどっちが勝ったんだ？」

「あえて勝敗をつけるなら勇次郎さんの勝ちでいいんじゃないですか？俺は最後の一発で胸骨を折られちゃいましたし」

私は今日何度驚けばいいのだろうか？何の気負いもなくそう言う三浦に続けて問う。

「三浦、君は負けでいいのか？」

「うくん……ストライダムさん、格闘家とプロレスラーの違いって何だと思えます？」

逆に問いを返されたが私は考えて答えを返す。

「攻撃を受けるか受けないかだろうか？」

「これはあくまで俺の考えなんですけどね、両者の違いはリングに上がる目的にあるんじゃないかと思うんですよ」

「リングに上がる目的？」

「ええ、格闘家は相手に勝つためにリングに上がる。でもプロレスラーは見せ付けるた

めにリングに上がるんです」

「私が首を傾げると三浦はコップの水を飲み干してから言葉を続ける。

「プロレスは相手の攻撃を受けます。じゃあ何で受けるのかというの見せ付けるためなんです。俺は凄いだろ、強いだろってね。そういう意味でいうとプロレスは格闘技というよりはボディービルやフィジークの方が性質が近いのかな？」

「相手のポテンシャルを100%引き出し受けきる。そうする事で自分の強さを、凄さを見せ付ける事が出来たなら勝敗は二の次なんですよ」

「だから試合の流れの中で自分が勝つことが自然だと感じたなら勝ちに行きますし、相手が勝つ方が綺麗に終わると思えば受けきって負けます。もともとプロレスラーも人間ですから、試合でテンションが上がると流れを無視して勝ちに行っちゃう事も多々ありますけどね」

そう言つて苦笑いをする三浦に私は、彼は心の底からプロレスラーなんだなと感じた。

「苦戦をする事に苦戦をする日常……」

「うん？三浦、何か言つたか？」

「いえ、何でもありません。まあそういう事なので、さっきの喧嘩に勝敗をつけるなら勇次郎さんの勝ちって事で。その方が綺麗ですから」

そこで話が途切れると夜もふけてきたとあつてディナーは終わりとなった。

三浦と勇次郎を送り届けた帰り道に思う。私は今日という日を忘れる事はないだろう。

だが一つ問題がある。それは……あの二人の喧嘩を見た興奮の熱が未だ引かず、今夜は眠れそうにないという事だ。



side：範馬勇次郎

これ程に満ち足りたのはいつ以来だ？

傭兵として初めて戦闘をした時か？マホメド・アライと出会った時か？いや、どれも今程に満ち足りた事はなかった。

苦戦をする事に苦戦をする日常。この退屈な日常の感覚は生涯理解を得られぬと思っていたが、今日理解を得られる友と出会えた。

三浦良意。俺の生涯で初めての理解を得られる友よ。貴様との出会いに感謝する。

ああ、今日は良く眠れそうだ。

……江珠の所で寝るか。満ち足りた今なら万が一にも力加減を誤る事はあるまい。そして夜が明けたら刃牙を頭の一つも撫でてやろうか。

ああ……今日は最高の一日だ。

第11話『山籠りする少年とプロレスラー』

「三浦さん、俺……親父に撫でられた」

勇次郎さんと喧嘩をした翌日、学校に行こうと準備をしていたら突如大荷物を背負った刃牙君が訪ねてきてそう言った。

「もしもし、葉瀬先生？三浦です。すみません、今日はちよつと遅れます。はい、失礼します」

担任の先生に連絡を入れると刃牙君を家の中に招き入れる。

「朝、突然親父と母さんが一緒に家に来て……」

話を聞いてみると勇次郎さんと刃牙君のお母さんが、刃牙君が1人で住んでいる家に突如2人でやって来たそうだ。

2人は刃牙君が見たことないぐらい上機嫌な様子で、それで何の前触れもなく勇次郎さんに頭を撫でられて驚いたんだとか。

「俺、嬉しいとか恥ずかしいとか、なんか頭の中がグチャグチャになっちゃって……」

「それで走って逃げて来ちゃったと？」

俯き加減で頷く刃牙君に俺は苦笑いする。

「勇次郎さんらしいとかなんというか」

「三浦さん、親父を知ってるの？」

「知ってるよ。というか昨日喧嘩したからね」

昨日の事を刃牙君に話す。話を聞いた刃牙君は納得した様に頷いた後、不機嫌な顔になる。

「三浦さん、俺、三浦さんのことスゴイと思ってるし尊敬してる」

「ありがとう」

「でも、その、俺今……親父の話でなんかその……嫌な気持ちになってる」

俯いて拳を握る刃牙君に俺は微笑む。

「それは自然な感情だと思うよ」

「えっ？」

「刃牙君はお父さんを取られたと思ったんじゃないかな？なら、嫌な気持ちになるのも当然だよ」

自分の気持ちに気付いたのか刃牙君は顔を真っ赤に染める。そんな刃牙君の頭をポンポンと軽く叩く。

「焦らなくていい。勇次郎さんは待っててくれるからさ」

「うん……」

色々と感じ極まったのか涙を流し始めた刃牙君。そんな彼が落ち着くまでゆつくりと待つ。

「グシツ、ありがとう三浦さん。なんか色々スッキリした」

「そっか、それはよかった。ところで刃牙君、そんな大荷物でどこに行くんだい？」

「飛驒に山登り」

話を聞くと先日、ボクシングジムにいわゆる道場破りに行ったらユリー・チャコフスキーというボクサーにボコボコにされたらしい。

それで一から鍛え直すために山籠りをするんだとか。

「一人で大丈夫かい？」

「大丈夫だよ。山小屋まで行けば安藤さんって知り合いもいるから」

「そうか、いつてらっしやい」

大荷物を背負った刃牙君を手を振って見送る。そして改めて準備をして玄関を出るとふと思ひ立つ。

「もしかしたら刃牙君に弟か妹が……って、それを言うのは野暮か。いつてきまーす！」

「はーい、いつてらっしやい」

やたらと若々しい母さんの見送りに手を振ると、俺は学校に向かって歩き出す。

そしてしばらく歩いているとリムジンが俺の横に止まった。なんかデジャヴ？

「朱沢江珠です。夫と息子がお世話になりました」

リムジンから降りてきたのは勇次郎さんの奥さんで、刃牙君のお母さんの朱沢江珠さんだった。

江珠さんが俺に丁寧な頭を下げると、側に控えていた栗谷川さんがアタツシユケースを差し出してくる。

それを受け取ると江珠さんはまた丁寧な頭を下げてからリムジンに乗り込んだ。あっ、勇次郎さんもいたのか。江珠さんが勇次郎さんに寄り添う光景は仲の良い夫婦そのものだ。

こうして刃牙君から聞いていたのと違う様子を見ると、色々と拗れていた家族間の関係も少しは良くなったのかなと思いきや浮かんできると、

ゆっくりと走り出したリムジンを手を振り見送ると電話を手に取った。

「金蔵(かねぐら)頭取、三浦です。いつもお世話になってます。すみません、また預かって貰いたいんですが……はい、それじゃお伺いしますね。はい、失礼しま〜す」

今都内で1、2を争うメガバンクの頭取に連絡を取ったんだが、これはまだ未成年の俺がこんな大金を銀行に持っていつても面倒が起こるだけなので、その面倒を回避するために連絡をしたのだ。

「そうだ、週末にでも刃牙君の様子を見に行ってみようかな。山登りなら足腰を鍛えるのにちょうどいいし」



side：範馬刃牙

「刃牙！逃げろー!!!」

飛騨の山に登って数日、安藤さんが言っていた夜叉猿と遭遇してしまった。

安藤さんが声を上げる前に不意をついて鉋で一撃見舞ったけど、それを受けた夜叉猿は平然としている。

それを目にした俺は恐怖で足が震え逃げるのが出来なくなっていた。

安藤さんはファイティングポーズを取って夜叉猿と戦う気だ。けど安藤さんも冷や汗を流して緊張している。

俺が上まで来た震えで歯をガチガチと鳴らし始めたその時……。

「ホキヤアー……!!!」

不意に夜叉猿が振り向いて咆哮を上げた。

夜叉猿の視線の先を追うと、何か大きな物を背負った大きな何かが走って来ているのがわかった。

「……三浦さん？」

「よっ、刃牙君。元気にしてるかい？」

毛を逆立てて威嚇する夜叉猿を気にもせず、三浦さんは笑顔で俺に声を掛けてきたのだった。



side : とある自衛官

端的に言って驚きました。まさか三浦氏があれほどの身体能力を有しているとは想像もありませんでしたから。

あれほどの重量を背負って山道を時速20kmで走行する。しかも鼻歌を歌いながら。私も装備を背負って行軍訓練をするのでその凄さを良く理解出来るのですが、正直に言って理解し難い光景でした。

声を掛けたのかですか？ええ、もちろん声を掛けました。あれほどの重量を背負った

状態で転んだら危険ですから。

そうしたら三浦氏は『ご指導ありがとうございます！自衛官の皆さん、訓練頑張ってください！』と逆に激励を貰ってしまいましたよ。はははっ。

惜しむらくは三浦氏と出会ったのが訓練中だった事ですね。彼のサインを貰いそびれてしまいました。

……もし三浦氏と戦闘になるとしたらですか？フル装備でもごめんですね。私では勝ちの目が見えませんか。

何よりも我々自衛官は日本国民を守る為に存在します。彼のような好青年とは戦う理由がありません。

それに……私は三浦氏のファンですから。いえ、正確にはあの時にファンになったと言わべきですね。プロレスに興味がなかった私ですが、あの一時でプロレスラーというものに魅せられてしまいましたよ。

それでは失礼します。彼の激励に応えるべく、より訓練に励まねばいけませんから。

第12話 『山籠もりする少年とプロレスラー その2』

side：範馬刃牙

「よっ、刃牙君。元気にしてるかい？」

「ホキヤアアー!!!」

笑顔で声を掛けてくる三浦さんに夜叉猿が威嚇をしている。

そんな夜叉猿を見た三浦さんが困った様に苦笑いをしながら頬を掻く。

「えつと……刃牙君、その人が安藤さんでいいのかな？」

「えっ？あつ、うん」

「安藤さん、山小屋に住んでるって事はこの子の事も知ってると思うんですけど……」
の子、国から保護指定とか出てたりします？」

保護指定？急にそんな事を言われて頭が混乱した。

「あつ、ああ、出てるが……」

「うわっ、マジかあ。そうするとケガさせない様にならないとなあ。ほらあ、怖くないぞお」

「ホキヤアーーー!!!」

背中の大荷物を下ろすとそれからバナナを取り出した三浦さんは、バナナを夜叉猿に差し出しながらあやす様に話し掛けていて、夜叉猿は警戒しているのか更に三浦さんを威嚇する。

「うーん、どうしたものかな？そもそも何でこんなにこの子は興奮してるんだ？」

「ええ……」

いや、どう見ても三浦さんを警戒してるじゃん。思わず俺と安藤さんは異口同音で声を出しちゃったよ。

「あっ!？」

今まで威嚇をしていた夜叉猿が不意に三浦さんに跳び掛かった。けど三浦さんは事も無げに夜叉猿の攻撃を簡単に避けたり捌いたりしていく。……あんな戦い方も出るんだ。

「（こらこら、あんまりおいたをしちやダメだぞ……つと!）」

しばらく夜叉猿の猛攻を避けたり捌いたりしていた三浦さんだけど、不意にタンツと何かの音が響くと同時に夜叉猿の身体がくの字に曲がり、三浦さんが拳を突き出した格好でいた。

そして夜叉猿が地面に倒れて動かなくなると、三浦さんと夜叉猿の戦いが終わったの

を理解した。

(見えなかった……)

いつ攻撃したのかわからなかった。あれ、どうやってやったんだ？

「えっと、大丈夫だよね？」

困った様に頭を掻きながら夜叉猿の様子を見る三浦さんの姿はなんか面白い。そう思ったらふと気付いた。身体の震えが止まっている事に。

「ああ……まあ、大丈夫でしょ。安藤さん、何かこの子がここに来た理由とかに心当たりがあったりしませんか？」

「あつ？ああ、おそらくは刃牙……というよりは勇次郎が関係していると思うが」

「勇次郎さんが？」

「ああ、昔に勇次郎がそいつの番をな……」

安藤さんがそう言うのと三浦さんは天を見上げて頭を掻く。

「その頃の勇次郎さんは鬱憤が溜まってたんだろなあ……。えっと安藤さん、じゃあその番に関わるモノはあつたりしませんか？」

「ああ、ある」

「すみませんがそれを持ってきてもらえませんか？なんかこの子賢そうだし、もしかしたらそれが目的かもしれませんから」

ドストスと小走りで安藤さんがいなくなると、三浦さんはその場に座って片手に持っていたバナナを食べ始める。

「刃牙君も食べるかい？」

「えっ？えつと、いただきます」

モソモソとバナナを食べながら思うのはさっきの三浦さんの夜叉猿の攻撃を捌いていた動きだ。なんていうか……そう、すごく綺麗だった。

「三浦さん、さっきの動き……」

「うん？あれかい？プロレスラーっぽくなかっただろう？」

「はい」

「あれは中国拳法の動きだよ。化勁って言ってね。主に相手の攻撃を流したりする技法ってところかな」

バナナの皮をゴミ袋に入れた三浦さんが立ち上がる。

「その子も寝てるし安藤さんが戻るまで暇だから、軽くスパリングでもして化勁を体験してみるかい？」

「っ!?!はい!」

急いで立ち上がった俺はジャンプしたりして冷や汗で冷えた身体を温める。

「ツッシャー!お願いします!」

「はい、お願いします。よし来い！」

三浦さんにパンチやキックを放つけど当たらない。片手で簡単に捌かれてしまう。受け止めるでも弾くでもない感覚……これが流すってやつかあ。

時折重心が崩れたところを軽く足を払われて転がされるけど、経験した事のない不思議な感覚が楽しくて仕方ない。

どのタイミング、どの角度、どうやって流すのか。何度も体験して身体で覚えようとするが中々難しい。

「大事なものは型じゃなくて力の流れだよ。力の流れがわかる様になれば、流しの技術は意外と出来る様になるものさ」

三浦さんの言葉を素直に受けて自分と三浦さんの力の流れを意識する。

(……っ!?!、これかあ)

言い表し難い何か、それが俺と三浦さんに目まぐるしく流れてるのがなんとなくわかる。

「うーん、そう簡単に掴める様なモノじゃないんだけどなあ」

そう言つて三浦さんは苦笑いをする。何でだ？

「それじゃ今度は身体を使った流しを見せてあげようか」

そう言うのと三浦さんは俺のパンチを受けた。けど、殴った感触がほとんどない。

「何だろ？力が三浦さんの中に入っていないか？」

「うん、良い感覚をしてるね。もう少し続けてみようか」

パンチだけじゃなくキックも放つけど、どれも当たっても当たった感触がほとんどない。

そして胸に向けて放ったパンチの1つを受けた三浦さんは、その場でクルリと回転したと思ったら肘でのカウンターを寸止めしてきた。

「これは耐えないのがポイントかな。耐えないって意外と難しいんだよ。人は自分に向かってくるものに対して本能的に反射を起こしやすいからね」

三浦さんの言葉がほとんど聞き取れない程に直前の三浦さんの動きに衝撃を受けていた。その衝撃のおかげなのか自分の中から戦いのイメージが沸き上がってきて止まらない。親父の攻撃を無力化しながら反撃のカウンターを放つイメージが。

「み、三浦さん！今のもう一回！」

「いいよって言ってあげたいけど残念。安藤さんが戻ってきちゃったね」

そう言った三浦さんが指差す方に目を向けると本当に安藤さんが戻って来ていた。思わず睨んでしまう。

「おっ？刃牙のやつどうしたんだ？」

「いいところを邪魔されておかんむりつてとこですかね。それで、それがそうなんです

か?」

「ああ、これがそいつの番の遺骨だ」

安藤さんは手に持っていた布にくるまれた物から丁寧に布を外していく。そして布が外れて遺骨が露になると、夜叉猿がガバツと上体を起こした。

「君が探していたのはこれかい?」

気絶前の興奮が嘘の様に大人しい夜叉猿は、三浦さんが差し出した遺骨を大事そうに受け取るとゆっくりと去っていった。

「そうだ安藤さん、今日泊めてくれませんか?」

「あん? 今日と言わず幾らでも泊まってけ」

「いや、学校がありますので明日帰ります」

明日帰るのか……三浦さんは真面目に学校に行ってるんだな。

その後、山小屋に移動して荷物を下ろした三浦さんとスパリングをして一日過ぎた翌日、山に入ってからの日課になっている朝の薪割りをしようと外に出たら夜叉猿がいて驚いた。

「おわっ!? ……つて、えっ? くれるの?」

地面にあつた息の無い熊に気付くと、夜叉猿はニカツと笑って熊を押し出してきた。

「おおう熊かあ。夜叉猿、ありがとな」

山小屋の中から出てきた三浦さんがそう言うのと夜叉猿は一鳴きしてから去っていった。

「三浦さん……夜叉、いいやつだね」

「そうだね。さて、こいつを裏に運んで安藤さんに解体してもらおうか」

そう言うのと三浦さんは熊を軽々と肩に担ぎ上げた。……プロレスラーってすげえな。



安藤さんに熊肉の燻製をもらってホクホク気分での帰り道、山を降っている途中で不意に覚えのある気配が横に並んだ。勇次郎さん来てたんだな。

「消力か……使い手を見たのは初めてだ」

「俺の師父も使えますよ。まあ、攻めの消力はともかく受けの消力はプロレスラーっぽくないので、めったには使いませんけどね」

実は刃牙君に身体を使った化勁をやってみせている時に消力も混ぜていたんだけど、刃牙君は気付いた様子がなかった。まあ、むしろ気付いた勇次郎さんがすごいんだけどね。

「それで、勇次郎さんから見て刃牙君の成長はどうですか？」

「まだまだだ」

そう言う勇次郎さんだけど悪くはないといった雰囲気を感じる。素直じゃないなあお父さん。

「あつ、そうだ。安藤さんから熊肉の燻製をもらってきたので、一緒に食事でもどうですか?」

「ふんっ」

これはOKの意味での返事だな。よしっ、たっぷり食うぞお。

山を降りると出口でストライダムさんがジープに寄り掛かって待っていた。いつもお疲れ様です。

その後、勇次郎さんとストライダムさんと共に以前に行ったホテルで熊肉を中心にジビエ料理をたっぷり堪能した。

「あつ、勇次郎さん。この余った熊肉の燻製を江珠さんへのお土産にしてください。お酒も進みそうですし、一緒に楽しんでくださいいね」

「ふんっ」

これは了解の意味での返事だな。夫婦仲が良い様でなによりです。

第13話『空手界の最終兵器とプロレスラー』

飛驒で山登りをした翌週の週末、愚地さんに呼ばれて神心会本部に足を運んだ。

「どうも愚地さん、お久し振りです」

「愚地さんたあ水臭えじゃねえか三浦。独歩でいいぜ」

「じゃあ独歩さんで。俺も良意でいいですよ」

神心会本部の応接室でそんな挨拶をすると愚地さんと対面になって座る。

「それで、俺にどんな用ですか？」

「わりいがちよいと待ってくん。お前さんに会ってもらいてえ奴が来るんでな。それまではゆっくり茶でも飲んでくれ」

そういうわけでゆっくりと独歩さんと茶を飲んでいく。うん、いいお茶だなあ。世界最大の空手団体の総帥ともなれば、普段からこういういいお茶を飲んでるのかもね。

「ところで良意、お前さん休業だって話だがどうしたんだい？」

そう言いながら独歩さんはスポーツ雑誌を目の前の机にポンツと置いた。

「ああそれですか。ちよつと喧嘩をしてケガをしたんですが、それを猪狩さんに報告したらいい機会だから休んじまえて事で休業する事になったんですよ。あつ、喧嘩をし

てケガをした事はオフレコでお願いしますね」

「おう、オフレコにしてやるからお前さんと喧嘩した相手の事を教えろや。お前程の奴をケガさせるなんて並みの奴じゃねえからな」

そう言いながら独歩さんはニヤニヤと笑っている。楽しそうだねえ。

「範馬勇次郎さんって言うんですけど、知ってます?」

「……範馬勇次郎?」

さつきまでほんわかとした雰囲気だった独歩さんの気配が、勇次郎さんの名前を聞いた瞬間にピリツと引き締まる。

「その感じだどうやら知っているみたいですね」

「……知ってるものにも、この傷とこの傷は昔に奴に奴にやられたもんだ」

そう言つて独歩さんは顔の傷を指し示す。ああ、その頃の勇次郎さんは鬱憤が溜まつてたんだろうなあ……。

「……で?どつちが勝つたんだい?」

「勇次郎さんですね。俺は胸骨を折られちゃいましたし」

そう言つて独歩さんの雰囲気是和らぐ。

「まったく……あつさりと負けたって言いやがって」

「俺はプロレスラーですからね。勝ち負けは二の次なんですよ」

「……そうかい。ところで胸骨はもう大丈夫なのか？」

「はい、もう治りましたよ」

そこで話が途切れたのでお茶のお代わりをお願いする。しかし待ち人が来ないなあ？ どうしたんだろ？



side : 愚地独歩

(まさか良意の奴がオーガと戦っていたなんてなあ)

そう考えた俺は良意との地下での試合を思い返す。

(俺の打撃じゃ良意の骨を折ることは出来なかった。とすると今の俺じゃオーガとやるにやちと足りねえか？ 例の拳もまだ完成とは言えねえしよ)

こりや鍛え直さにと考えていると不意に応接室のドアがノックされた。

「押忍！失礼します館長。克己さんが来られました」

「おう、通してくれ」

まったく、やっと来やがったか。

「来たぜ、親父。いきなりなんだよ？ガールフレンドとデートでもしようかと思つてたのによお」

そう言い放つ私服姿にバッグを担いだ義息子の克己にニヤニヤと笑いそうになる。

「おいおい克己よお、俺あ知つてるんだぜ？あの日、良意の試合を見てからお前がガムシヤラに鍛え始めている事をよお。」

「お前に会わせたい客がいてな」

「会わせたい客つて誰……っ!？」

応接室のソファ―に座つてゆつくりと茶を啜っている良意に気付いた克己が驚き目を見開く。

「……三浦、良意？」

「おう、そうだぜ？」

「……休業中じゃねえのかよ」

「そこは俺のコネでちよいとな」

俺達の話が途切れたところで湯飲みを置いた良意が立ち上がる。相変わらず……いや、よく見りや前に戦つた時よりデカくなつてねえか？

「初めまして、三浦良意です」

「愚地克己……です」

「克己君って呼んでいいのかな？よろしく」

差し出された良意の手を取り握手をした克己だがよく見りや克己の奴、空いている手に鳥肌が立ってやがる。

怖れ？武者震い？まあ、どっちにしろ鼻っ柱が伸びてたこいつにとっては良い傾向だな。

「それで親父……今日はどうしようってんだ？」

「そんなのおめえ、組手に決まってんだろう？」

「……誰と誰が？」

「おめえと良意だよ」

そう告げると克己は強く拳を握り締める。

「……わかったよ。それじゃ、ガールフレンドに断りを入れてくるから先に道場に行くぜ」

そう言って克己は応接室を去っていった。くつくつくつ、わかりやすい嘘だな克己。心を落ち着けるなり集中する時間が欲しいんだろう？いつでもやれる準備が出来てねえのはまだまだ未熟だな。

「それで独歩さん、どの程度やったらいいんです？」

「察しがいいな」

「道場破りやらなんやらで慣れてますからね」

道場をやつてると血気盛んな若い兄ちゃんが時折来ることもあるんだがなるほど、プロレスのジムも似た様なもんなのか。

「取り敢えずあいつの伸びた鼻っ柱をへし折つてくれたらいい。ああそうだ。プロレスラーとして身体能力面で圧倒するのもいいが、技術面でもあいつを圧倒してくれや」

「技術面は独歩さんが見たいだけじゃ？」

「おいおいバカ言つちやいけねえよ。俺は息子のための思つてだなあ」

凶星をつかれたが気にする必要もねえだろ。こいつはもつたいぶつたりするタマじゃねえからな。

「仕方ないですねえ。夕飯で手を打ちますよ」

「そう言うだろうと思つてもう料亭を予約してあるぜ」

御老公のツケがきく料亭だけどな♪

「準備がいい事で。それじゃ俺達も行きますか」

「おう、楽しみだ。たつぷりと見学させてもらうぜ」

克己、お膳立ては整えた。一皮剥けるかはおめえ次第だぜ。

第14話『空手界の最終兵器とプロレスラー その2』

side：愚地克己

「ああ、そういうわけだから今日はジムに行けないんだ。ごめんね優希ちゃん。親父さんによろしく」

神心会会員でジムを経営してる田沢さんの娘さん……優希ちゃんと同じ年なんだが、その縁でここ最近では田沢さんのジムに通って身体を鍛えていた。

それで今日も田沢さんの所でトレーニングをしようと思ってたんだが、今断りの電話を入れた。『あの』三浦良意と組手をするからだ。

道着に着替えながらも震えが止まらない。俺の空手がどこまで通じるのか。楽しみで仕方がない。

自分で言うのもなんだが俺は天才だった。サーカスにいた頃も、親父の養子になつてからも同年代の奴に負けたことは無い。

そんな俺が初めて勝てないかもしれないと予感を感じたのが三浦良意だ。

親父はいつも言っていた。強い奴は世の中に一杯いると。だが、同年代で俺よりも強

い奴とは会ったことがなかった。

しかし今日、同年代で俺よりも強いかもしれない奴と組手が出来る。そう思うと身体が武者震いで震えるぜ。

などと考えていたものの、冷や汗が止まらないのが現状だ。

(くそつ、なんだっていうんだ)

俺がおかしくなったのはあいつを見てからだ。親父と母さんと一緒にあいつの試合を見てから俺の中の何かが崩れちまっている。

勝てる、負けやしないと自身を鼓舞しても一向に上がってこない。冷や汗で冷えてしまっている身体を動かして無理矢理暖める。

「準備出来てるかあ〜?」

親父の声に振り向くと、親父は三浦良意と一緒に道場に入ってきた。

「ああ、出来てる。……けどそっちは?」

「いらねえだろ。なあ?」

「う〜ん……そうですね。やってるうちにあつたまるでしょ」

……なめやがつて!

三浦が上着のパーカーを脱ぐとTシャツになるが、Tシャツの上からでも鍛え抜かれた身体がわかる。

一瞬怯んでしまうが……怯む？俺が？

「ハッ！」

気合いを入れて己を鼓舞する。怯んでなんかいない。ただの武者震いだ！

道場の中央に立つと三浦も対面して立つ。

「よし、それじゃ……始めイ！」

様子見なんてしねえ。最初から全力でいってやるぜ！

下段蹴りを放った瞬間、俺の脳裏にぶ厚いゴムを巻き付けた大木が浮かび上がった。

視線を上げて三浦の顔を見ると平気な顔をして立っている。そんな三浦の鳩尾に三日月蹴りを放つがびくともしない。

中段突き、後ろ蹴り、膝蹴りと三浦の腹を攻め立てる。感触は完璧だ。けど効いていない様子。様子が全くない。

一つ息を入れるために離れると不意に親父の声が聞こえる。

「克己よお、なんで顔を突かねえ？」

「なっ?!親父、これは組手だろう!？」

「良意、構わねえだろ？」

「ええ、いいですよ」

さも当然の如く言葉を交わす二人に驚くと同時に、どこか二人が遠く感じた。

「克己、これはフルコンタクトルールの試合じゃねえ。良意が了承した以上はなんでもありでの組手だ」

「身内ならまだしも、相手は部外者だぞ?!」

「かあゝつ、まったく……こんな経験はめったに出来ねえつてのに。責任は俺が取る。だから遠慮せずにやっちまえ」

三浦に目を向けると彼は頷いて了承の意を示す。

「……どうなつても知らねえからな!」

金的から水月への蹴り、更に水月への蹴りを足場にして跳び上がりながら顎へと膝を放つ。

そして膝で上を向かせた三浦の顔に跳び上がって落ちる重さを利用して肘を叩き落とす。

これは前に親父に聞いてひそかに練習していた技で実際に使ったのは初めてだが、イメージ通りに完璧に決まつたぜ。けど……。

「……どんな身体してんだよ」

「ハツハツハツ! すごいぞ? だから遠慮すんなつて言つたんだ」

「なんで親父が嬉しそうに自慢してんだ」

「そりやダチの事だからな。嬉しくても不思議じゃねえだろ」

なんとというか毒気が抜けた。そんな感じで俺の身体から適度に緊張が抜けた気がする。

「まあ見ての通りに俺は頑丈だからさ。遠慮せずに来てよ、克己君」

そう言つてニツと笑顔を見せる『三浦さん』に俺は敵わないと思つた。でもそれでいい。今はな。

「オスツ！じゃあ遠慮なくいかせていただきます！」

「うん、ツシヤア来い！」

ここまで組手が楽しいと思つたのはいつ以来だ？拳を、蹴りを放ちながらそう考えるが、直ぐに余計な事を考えるのを止めて、俺は三浦さんとの組手に夢中になる。

だが三浦さんの反撃が始まると、むしろ清々しい程にボコボコにされたのだった。

第15話 『空手界の最終兵器とプロレスラー その3』

「三浦さん、俺の下段蹴りを止めたアレですけど、何ですか？ すつげえ痛かったですけど」

「ああ、斧刃脚のことかな？」

克己君との組手が終わった後、俺と克己君はシャワーを浴びてから鎬先生の所へ行き、それから独歩さんの案内で見覚えのある料亭で飯を食い始めた。

そして飯を食い始めると克己君から質問攻めにあっている。それに俺が答えるんだけど克己君の好奇心は中々収まらない。

「サッカーのサイドキックみたいな形で踵を使って蹴るから一見地味なんだけど、使い手によつては一撃で相手の脛を砕くことも出来る技だね」

「そして克己相手に使ったみてえに迎撃にも使える代物ってな。他にも応用がありそうだな？」

独歩さんは時折こうして注釈を入れてくれたりするけど、だいたいは克己君同様に好奇心を満たしにくることが多い。

強さに対する貪欲さは筋金入りのものを感じるね。

「ええ、サッカーのトラップみたいに相手の蹴りの威力を吸収した後に、そのまま相手の足を踏んで崩したりもしますね」

「なるほど？」

二人は箸を置くと立ち上がって座敷の端っことで動きを確かめ始める。それを尻目に俺は箸を進める。うん、美味い。

「ちよつと失礼」

「折角食つたのを戻すんじゃないぞ。そんなんじゃない身体を作れねえからな」

「言われなくてもわかってるよ」

しばらくすると限界まで食べたのか克己君は苦しそうに席を立った。

克己君が座敷を出ていくと独歩さんがため息を吐く。

「あいつは食が細くていけねえ」

「頑張つて食べた方だと思えますけどね」

「俺が若い頃には酒を飲んで胃をバカにしてたらふく食つたもんだが、立场上そうするわけにもいかんのがなあ」

「猪狩さんも同じことを言っていましたね」

「食わにや強くなれねえからな。空手に限らずプロレスに相撲と、日本の格闘技界じゃ少なからずあつたやり方だな。まあ、今の御時世にそれをやってバレたらうるせえから

なあ。やりたくてもやれねえのが現状だ」

だからこそ一度の食事で済ませず何回にも分けて細かく栄養補給をするやり方が現代の主流なんだけど、幸いと言っていいのかわからないが俺は猪狩さんと会ってからは量を食うに困ったことはない。

「それで良意、どうよう？」

なんで猪狩さんといい独歩さんといい主語が抜けるのかな？まあ、勇次郎さんと比べたらわかりやすいけどさ。

「端的に言って天才ですね。師父が言ってた種類に分別するなら『思念』の天才ってところかなと」

「種類？」

「ええ、師父が言ってたんですけど、武の道には主に3種類の天才がいるそうです」

食後の焙じ茶を飲んで喉を潤してから言葉が続ける。

「『身体』の天才、『感』の天才、『思念』の天才の3種類の天才です」

「なるほど……確かにそうかももしれねえな」

身体の天才は文字通りに恵まれた身体を持った者のこと。感の天才は身体操作や力の流れ、意識の感知等に優れている才を持つ者のこと。そして思念の天才は……イメーヂをする才能に優れている者のことだ。

身体と感と比べて思念？となる人が多いが、イメージが人の身体に与える影響はかなりの大きい。まあ、実体験してみないと理解や納得がしにくいけどね。

「組手の後半で迎撃が多かったのは克己の才が理由か？」

「はい、今はまだ大丈夫そうですけど、イメージのコツを掴んだら自身の耐久力の限界を越えた一撃も放ちかねないかなあつて」

「それほどか……俺も克己は天才だと思っちゃいたが」

そう言うのと独歩さんは腕を組んで唸り声を上げる。

「組手の後半の方が明らかに克己君の動きにキレがありましたからね。ああいうメンタルにパフォーマンスを左右されやすいタイプは思念の才を持った者の場合が多い……つて、これも師父の受け売りですけどね」

「お前の師匠は随分と物知りだなあ」

「130歳を超えて尚も現役の中国拳法家の妖怪爺ですよ。あれ？もう140いつてたかな？」

老いてもなお盛んどころの話じゃないもんなあ。なんせ100歳を超えて子供作ったりしてるしあの師父は。春成さんは元気にしてるかな？

「とりあえずは克己にもつと部位鍛練をさせるしかねえか」

「それが一番いいですね」

「素直に言うことを聞けばいいんだがな」

そう言つてつるりと頭を撫でる独歩さんだが、あまり不安には思つてなさそうだ。今日の組手に手応えを感じてくれているんだろう。

克己君も戻つてきてそろそろお暇しようかという頃、ピシヤツと勢いよく座敷の戸が開けられた。

その開けた人物は……。

「……独歩！何故儂に報せん!？」

徳川の爺様だった。

独歩さんに目を向けると面倒だと思つている雰囲気なのがわかる。

「いやいや、今日は政府のお偉いさんと会谈だとかおつしやつてたじゃないですか」

「そんなもん後回しで構わん!」

「いやいや……」

あーあー、独歩さんも面倒な人に捕まっちゃったなあ。

「愁傷さまと思いつつふと思いついたので克己君に声を掛ける。」

「克己君、夏休みの予定は空いてるかい?」

「はい?空いてますけど」

「それじゃパスポートはあるかな?」

頷いた克己君に俺はニツと笑顔を向ける。

「それじゃ俺と1カ月の海外旅行と洒落こもるか。もう1人誘うつもりだけどね。あつ、旅費とか諸々の金は俺が出すから心配しないでいいよ。アメリカと中国に行く予定だから、親しい人にお土産のリクエストだけ聞いておいて」

そう告げると克己君はポカンとしたが、面倒な徳川の爺様に捕まる前に克己君を連れて逃げるのだった。

独歩さん、ゴメンね♪

第16話 『アメリカ旅行とプロレスラー』

夏休みに入ると俺は克己君と刃牙君の2人と共にアメリカ行きの飛行機に乗り込んだ。

「はい、刃牙君おめでとう」

「よっしやあー!」

「くそっ、刃牙、次は俺の番だ!」

さて、今現在アメリカ行きの飛行機の中で到着まで暇な俺達はちよつとした暇潰しをしている。それは……コイン取りゲームだ。

内容としては簡単で手の平に乗せたコインをもう1人が取る。そしてコインを乗せた方は取られない様にするゲームだ。

対面してコインを乗せた人に相手が手の甲を合わせる様にした状態で開始。ゲームスタートの合図は無し。コインを取りに行く人のタイミングで始めてよし。だいたいこういったルールでやっている。

それとこのゲームではコインを取った人に俺から旅行中に使うお小遣いとして10ドルを進呈するので、2人は遊びでありながらも真剣にやっている。

まあでも、これは遊びだけど先を読む鍛練の一環でもあるんだよね。

コインを取りに行く方は意識や身体の起こりを可能な限り消し、コインを乗せた方は相手の意識や身体の起こりを読んで取られないようにする。単純だけど双方の鍛練になるからいい遊びなんだ。

「よしっ！」

「ちえっ、克己さん、次は俺の番だよ」

克己君に10ドルを進呈しながら俺は微笑む。

2人のコイン取りゲームの戦績は刃牙君優勢の状態だが、少しずつ差が詰まってきている。これは克己君の先を読む能力が向上してきているということだ。

それにしても……まさか江珠さんがファーストクラスを貸しきつちやうとはなあ……。本物の金持ちのやることはスケールが違うというか……。うん、刃牙君が愛されているということにしておこう。

「そういえば刃牙君、ユリーってボクサーへのリベンジはどうなったんだい？」

「うん？ ああ、なくなっちゃったよ。代わりに花山さんとの喧嘩になった」

話を聞くと花山って人はいわゆる自由業の人で、その道では有名な喧嘩師らしい。

「そっか、で？ どつちが勝ったんだい？」

「俺が勝ったよ。花山さんは三浦さん程じゃないけどデカイ人でき。三浦さんとのス

パーを経験してなかったら危なかったと思う」

うーん、刃牙君の様子を見るに遺恨は残ってなさそうだから大丈夫かな。

もし残ってたとしても江珠さんが金の力で解決しそうだし、それでもダメなら勇次郎さんがなんとかしちゃうだろうからね。

花山つて人とその周囲の人が変な事を考えないことを祈るよ。



「やあ、ユージロー、よく来てくれた」

伝説のボクサーであるマホメド・アライが笑顔で来訪した範馬勇次郎を招き入れる。

そして2人の会食が始まると不意に勇次郎が言葉を発する。

「愚息が世話になる」

「……変わったな、ユージロー。刺々しさが消えた。彼のおかげかな？」

アライの問いには答えず勇次郎はグラスのバーボンを飲み干す。アライは勇次郎のグラスにバーボンを注ぎながら微笑む。

「出会ったのはいつだ？」

「2年前になる。猪狩の紹介だね。彼と出会わなければ私はJ・r.に壊されていたかも

しれない」

そう話すと今度はアライがグラスを飲み干す。そしてユージローが無言でバーボンを注ぐとアライは一つ息を吐く。

「随分と絞れている」

「トレーニングを再開してね。J.R.には私の技術の全てを伝えたが、生憎と戦士としての心構えまでは伝えることが出来なかった。だからそれを伝えるために……ね」

「それだけではあるまい」

そう言いきる勇次郎にアライは肩を竦めるとおどける様に両手を広げる。

「もちろんさ。たとえ愛する息子といえど負けっぱなしは性に合わなくてね」

「クスクス……それでこそマホメド・アライだ」

グラスを飲み干した勇次郎が立ち上がるとアライも立ち上がる。

「ユージロー、またいつでも来てくれ」

「……ふんっ」

アライに見送られ外に出た勇次郎が不意に立ち止まる。

「アライ」

「何かな？」

「今のお前は……全盛期を超えている」

ストライダムがハンドルを握るジープに乗り込み勇次郎が去ると、彼を見送ってドアを閉めたアライは破顔する。

「凄いね、人体♪」

そう言つてアライはファイティングポーズを取ると、フラツシユと形容された伝説の右ストレートを超える一撃を放つたのだつた。

第17話 『アメリカ旅行とプロレスラー その2』

アメリカに到着して飛行機を降りると、Mr. アライが寄越してくれた迎えのリムジンに皆で乗り込む。

「ところで三浦さん、今さらだけど誰と会うのさ?」

「刃牙君も会えばわかるんじゃないかな?」

そう返答すると諦めた様に1つ息を吐いた刃牙君は、慣れた様子で備え付けの冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して飲み始めた。

「おい刃牙、いいのかよ?」

「こういうのは客用に用意してあるものだから大丈夫だよ」

その返答に若干遠慮がちになりながらも克己君もミネラルウォーターを取り出して飲む。

うん、こういう一面を見ると刃牙君も本物の金持ちの家の子なんだなあと思うね。

しばらくしてリムジンが止まり外に出ると、目の前に豪邸と形容すべき家がある。M

r. アライの邸宅だ。

「へえ、中々大きな家だね」

「中々つてお前、すげえ豪邸だろ」

2人の会話を聞いていると家庭環境の違いを感じる。まあ、独歩さんもそれなりにお金を持っているんだろうけど、あの人は対外的に必要な部分以外にはお金を使わなそうだからなあ。

中から執事さんが出てきて招き入れられると、そのまま奥へと進んでいく。そしてとある部屋に入ると……そこには前回あつた時よりも覇気に満ちたM r. アライの姿があつた。

「……マホメド・アライ？」

「うん、そうだよ」

異口同音でM r. アライの名を呼んだ2人を見て笑いそうになる。けど仕方ないか。M r. アライは格闘技の世界では伝説的な偉人だもんなあ。

「ヨシオキ、よく来てくれた」

「こちらこそ歓迎ありがとうございます」

「ハハハ、君と猪狩に閉ざす門は我が家には無いよ」

茶目つ気たつぷりにウインクをしながらそう言うM r. の姿は凄く絵になる。こういうカリスマ性は彼の生き様が醸し出すんだろうなあ。

2人を紹介してM r. が握手をするけど、2人は呆然としている。独歩さんも勇次郎

さんもMr. に負けず劣らず凄い人だけど、Mr. のカリスマは世界トップレベルだからなあ。2人がこうなるのも仕方ないか。

「早速だが運動する準備は出来てるかな？」

「ええ、もちろん」

「Good. それじゃ地下に行こうか。Jr. が待っている」

Mr. に先導されて地下を下りていくと、そこには十分な設備が整ったジムとリングがある部屋へと辿り着く。

そしてリングの上には……グローブを着けて十分に汗を流していたJr. の姿があった。

「Jr.」

Mr. が呼び掛けると動きを止めてJr. がこちらに振り向く。

「パパ?……ヨシオキ! やつと来たのか!」

「やあJr.、年末以来だね」

夏と冬の長期休みの度にアメリカと中国に行っているんだけど、去年に会った時よりもJr. は確実に成長してるのがわかる。肉体面と技術面だけだね。

「さあヨシオキ、早くリングに上がってくれ。直ぐにスパをやろう」

「まあまあJr.、ちょっと待ってよ。先にこの2人の相手をしてくれないかな？」

そう言つて俺は刃牙君と克己君へと目を向ける。

「さて2人とも、俺からの課題だ。アメリカ滞在中の2週間、彼と……マホメド・アライ Jr. とのスパ―で1ラウンド中に1度もダウンをしない。これを達成したら1000ドルをあげるよ。頑張つて」



side : 範馬刃牙

1ラウンド中に1度もダウンをしない? それで1000ドル? 三浦さんが冗談を言つてないのはわかるけど、そんなに凄い相手なのかあいつは?

「克己さん、先いい?」

「おいおい、ここは年上に譲つてくれよ」

「ハハ、冗談。むしろ年下に譲つてくれる場面でしょ」

たぶん克己さんも三浦さんの言葉に思うところがあるみたいだ。強い奴と戦いたい……これは俺達にとつて本能みたいなものだからね。

「ヨシオキは随分と厳しいな。僕とやるなら1分でもいいんじゃないか?」

(……舐めやがって!)

俺の身体から一気に闘志が沸き上がる。

「克己さん、お先っ!」

「あつ、おい!……つたく、後で何か奢れよ!」

リングに上がった俺は克己さんにサムズアップを返す。

「ルールは?」

「キックでもグラップルでも好きに使ってくれていい。どちらにしろ、僕には当たらないから」

「……オーケー。ああ、自己紹介は?」

「ノー、君の名前を覚える必要性を感じていない」

心の底からムカつくけど、怒りを堪えて軽く何度か跳ねて力みを抜く。

「じゃあ、始めるよ」

(吠え面かかせてやる!)

三浦さんがそう言ってゴングを鳴らすと同時に踏み込む。

だが次の瞬間、俺の意識は途切れたのだった。

第18話 『アメリカ旅行とプロレスラー その3』

side: 愚地克己

「……マジかよ」

刃牙とは日本の空港で会ったのが初めてだから付き合いは短い。だが飛行機の中のやり取りで結構やれる奴だと感じていた。

そんな刃牙が一撃でKOされたのもシヨックだが、それ以上にマホメド・アライJr.の完成度にシヨックを受けた。

起こりの少なさは親父より下だが、パンチスピードに関しては親父クラスかもしれない。

……刃牙には悪いが先に見れとてよかつたぜ。

目に焼き付いたアライJr.の一撃を元に目を閉じてスパアのイメージをする。

だがイメージは程々に。以前に三浦さんに言われたんだが、イメージが人体に与える影響は大きいんだそうだ。

そして俺はそのイメージが人体に与える影響が人一倍大きいらしい。これは紛れも

なく才能だが、それにより俺の身体の限界を超えたパフォーマンスを發揮してしまう可能性が高いらしい。

だから今の俺は三浦さんと親父から自分の能力の限界を超えたイメージをするのは禁止にされているんだが、これは俺も納得して受け入れている。

なんせ今の俺は自分でもわかるぐらいに成長をしていつている。こんな楽しい時間を自分の不注意で失うなんて勿体ないからな。

(……こんなもんか)

シミュレーションである程度イメージが固まったところで目を開ける。

「克己君、準備はいいかい？」

「はい」

三浦さんに促されてリングに上がろうとしたところで気が付く。刃牙がリングサイドで寝かされていることに。

(敵討ちは厳し過ぎるが、せめてアライJr.に年上の意地はみせねえとな。……アライJr.は年下だよな?)

そんなどうでもいいことを考えながらリングに上がる。

「グローブは？」

「好きにしてい」

「じゃあお言葉に甘えて」

空手は徒手での戦いが基本。というかグローブをすると手首の自由が利かなくなつて色々やりにくくなるんだよな。だから素手の方が都合がいい。

俺は前羽の構えを取る。空手における鉄壁の構えだ。

イメージするのは親父……のそれから今の俺が出来る範囲にデチューンしたもの。

さて……どこまで出来るかな？

カーンツとゴングが鳴る。フーツと息を吐いて力みを抜く。

（見てからじゃ絶対間に合わねえ。大事なのはタイミング。そしてそのタイミングを掴むには……！）

不意に俺の脳内に思い浮かぶのは飛行機の中で行ったコイン取りゲーム。相手の起こりを察知するのが重要なあのゲームだ。

（なるほど、三浦さんはこの状況を想定してたのか……かなわねえな、全く）

不意に感じたそれに反応して左手が動く。

「ぶっ!」

鼻つ面に一発貫つちまった。貫つたのはおそらくジャブ。左手で触れて打点ずらせていなきや今ので終わつてたかもな。

「ふ〜ん?」

アライJ r. のそんな反応にイラツとするが仕方ねえか。なんせ実力差がハッキリしちまつてるからな。

不意に感じたそれにまた反応したが今度はまともに貰っちゃった。たぶんやられたのは左のダブル。一発まともに貰っただけで膝が震えちまつてるぜ。

「だいたいわかった」

「……ははっ」

絶望的な実力差。けど三浦さん程じゃねえ。それだけで気が楽になる。

「3分はまだ無理だが、1分は意地でも耐えてやるよ」

「オーケー、耐えられたら君の名前を覚えよう」

「……押忍！」



「うん、惜しかったね。1分まで後3秒だったよ」

「そうですか……くそっ」

J r. とのスパ―での気絶から目を覚ました克己君にそう告げると彼は悔しがる。初日であるコイン取りゲームの意図に気付いた克己君のセンスは凄い。先が楽しみだ

ね♪

刃牙君はまだ寝てるけどこれは仕方ない。まだまだ身体が出来てないし、完全に不意をつかれたからなあ。

そう思っていると刃牙君がガバツと起き上がった。うん、頑丈さは勇次郎さん譲りだね。

「……あつ、負けたのか……くっそ〜」

状況を理解したのか刃牙君が悔しがる。あれ程圧倒されて悔しがれるのもある意味で才能だ。

「ヨシオキ、2人が起きたのならリングに上がってくれ。スパーをやろう」

「オーケーと言いたいところだけど、どうやら俺より先にJ r. とやりたい人がいるみたいだよ」

そう言つて顔を向けるとそこには鼻歌を歌いながらバンテージを巻くM r. アライの姿があつた。

「……パパツ!?!」

驚くJ r. を尻目に刃牙君と克己君に笑顔を向ける。

「さあ、2人ともよく見ておくんだよ。拳を使った打撃とそれに特化した戦闘術……その完成形の1つを目にすることが出来るからね」

第19話『アメリカ旅行とプロレスラー その4』

「……パパ、ジョークは止めてくれ」

「ジョークじゃない。本気さ」

「ノー、僕はもうパパを超えている。スパーの必要性がない」

そんなJr.の言葉にMr.がニツと笑う。

「なら早々に私をKOしてヨシオキとやればいい」

「……オーケー」

2人の会話を聞いていた克己君と刃牙君はどこか気まずそうだ。

「三浦さん……大丈夫なんすか？」

「大丈夫大丈夫、ただの親子喧嘩だよ」

俺がそう言うのと刃牙君は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「どうしたんだい、刃牙君？」

「いや、その……親子喧嘩って外から見るとこうなんだなって……」

ああ、いずれやる勇次郎さんとの親子喧嘩を想像して、周囲からどう見られるかを考えちゃったのか。

「まあ、家庭の在り方はそれぞれだから、そう気にしなくてもいいと思うよ？」
「そうかな？」

「勇次郎さんの期待に応えたいんだろう？」

そう問うと刃牙君は頷く。

「なら周囲の目を気にせず思いっきり勇次郎さんと遊んだらいいさ。大丈夫。なにかあつても江珠さんがなんとかしてくるから。母は強しつてね」

ウインクしながらそう言う刃牙君は笑みを浮かべる。うんうん、子供は笑顔が一番だね。

「さあ、2人共しっかり見ておくんだよ。そうそう見られるレベルのものじゃないからね」

J.r. と Mr. の準備が整ったのを確認すると、俺はデコピンでゴングを鳴らしたのだった。



side : アライ J.r.

ナンセンス。その一言に尽きる。僕とパパの格付けはもう済んだというのに、何故。パパはまたリングに上がる？

振り向くとパパがガウンを脱いでいた。そしてガウンを脱いだパパの身体を見て驚く。見事にシエイプアップされていたからだ。

「……だから何だというんだ」

僕の呟きが聞こえたのかパパは不敵に微笑む。……オーケー、その笑みを直ぐに消してあげるよ。

カーンツとゴングが鳴ると同時に僕は飛び出しジャブを放つ。だがナツクルに感触が無い。避けられた。

続け様にジャブをダブル、トリプルで放つてみるがどれもナツクルに感触が無い。全て避けられている。

……おかしい、何故避けられる？以前のパパならば確実にくらつていたはずだ。

「何を不思議がつているんだ、Jr.？」

（……マグレだ！）

肩を入れて距離を伸ばすメキシカンジャブにフック、右ストレートにアッパー、更にはボディーへもパンチを放つがどれもこれもこれも避けられてしまう。

（何故だ？僕の調子が悪いのか？）

そう自問自答するが今日のヨシオキとのスパ―に備えてコンディションは完璧に整えてきた。調子が悪いのはありえない。

(ならばまさか……パパが強くなった？既に全盛期を過ぎたパパが？ありえない)

「J.r.」

混乱する思考を中断する様にパパが話し掛けてくる。

「私が持つ技術はお前に全て教えた。だが1つだけ教えていないものがある。それは……」

そう言ってパパは右のグローブで左胸を叩く。

「ハート、プライド、表現の仕方は色々であるが……ここはスピリットにしておこうか」

「スピリット……」

「そうスピリットだ。例え何人だろうと、例え国家だろうと揺るがすことが出来ないスピリット。それが私をマホメド・アライ足らしめるものだ」

大きい……パパはこんなに大きかったのか？何故か僕には今のパパがヨシオキよりも巨大に見える。

不意にカーンツとゴングが鳴った。1ラウンド目が終わったんだ。僕はコーナーに戻りながら安堵の息を吐き出す。

「J.r.」

声から感じる圧力に振り向けない。顔を上げることが出来ない。

「以前の私はお前とのスパ―では父親として相手をしてきた。だが次のラウンドからは一人の戦士として相手をする」

「ぐうの音も出ないように叩きのめしてやろう。楽しみにしておけ、ボーイ」

冷や汗が全身を包む。震えが止まらない。リングの上から逃げ出したい。

だがここで逃げたら僕の中で何かが終わってしまう。そんな根拠の無い確信が、僕の身体をリングの上に縛り付けたのだった。

第20話 『アメリカ旅行とプロレスラー その5』

「ちよつとやり過ぎてしまったかな？」

Mr. と Jr. のスパアが終わって Mr. に夕食をご馳走になっていると、不意に Mr. がそう溢した。

「いずれは必要なことでしたから」

「そう言ってもらえると少し気持ちが軽くなる」

天才の Jr. は Mr. の想像を超えて早く成長した。その結果、 Jr. は俺と会うまで負けらしい負けを経験せずにいたらしい。

本当は俺が Jr. の鼻っ柱を折れたらよかつたんだけど、俺と Jr. では体格が違い過ぎるから、 Jr. は俺に負けても仕方ないって思っている感じだったんだよね。だから俺じゃ Jr. の鼻っ柱を折れなかつたんだ。

それで Jr. のことを結構心配していたんだけど……どうやら余計なお世話だったみたいだね。

とは言うものの Mr. が Jr. の鼻っ柱を折る役目をした結果、 Jr. は鼻っ柱どころか心まで折れたようで部屋に引き籠ってしまった。早く復活するといいんだけど。

翌日になってもJ r. は部屋から出てこなかった。刃牙君と克己君のスパ―相手をどうしようと考えているとM r. が買つて出てくれたのでお願いした。

午前中はみっちり基礎を鍛えて午後からはM r. とのスパ―。スパ―の内容は1ラウンド目はM r. は手を出さず、刃牙君と克己君がM r. に1発でも攻撃を当てられる様に頑張る。そして2ラウンド目はJ r. の時と同様にダウンをしない様に頑張るとした。

「もう1回!」

「だめだめ、今日はもう終わり。休むのもトレーニングの内だよ」

刃牙君と克己君は何度やられてもM r. とのスパ―を望む。それはいいことなんだけど、休むことも覚えてくれないと困るんだよなあ。

それから2日、3日と経つてもJ r. は部屋から出てこなかった。

そしてM r. の御宅で世話になって1週間、漸くJ r. は部屋から出て姿を見せたのだった。



とあるジムから細身の青年が出てくる。彼の名はジャック・ハンマー。範馬勇次郎の

子の1人だ。

まるで幽鬼の様にフラフラと歩く彼の前に1人の男が現れる。父親である範馬勇次郎だ。

「範馬……勇次郎……？」

「そうだ」

しばし呆然としていたジャックだが気を取り直すと手にしていたバッグを放り構える。

「俺と……戦えー！」

「……ふんっ」

勇次郎が鼻を鳴らすとジャックは踏み込み仕掛けるが、ジャックは勇次郎に強く押され後ろに吹き飛ぶ。

ゴロゴロと転がるジャックはあまりの力の差に愕然とする。ただ押されただけのため然程ダメージは無いが、驚きのあまり身を起こしただけで立ち上がれなかった。

「……よく鍛えているようだが、足りないな」

己に才が無いのはわかっている。それ故に日に30時間のトレーニングという矛盾を己に課し続けた。それでも足りないのかとジャックは強く強く歯噛みをする。

「よく喰らい、よく寝ろ。お前に足りないのはそれだ」

勇次郎の言葉にジャックはきよんとする。数秒経ってアドバイスをされたのだと理解した。

「だが、それ以外はまあまあと言ったところか……」

そう言う勇次郎は無造作にジャックへと近付いていく。不意の勇次郎の行動と先程のアドバイスによりジャックは混乱して動けない。

すると……。

「よく頑張った」

その言葉と共に勇次郎の手がジャックの頭に置かれた。

ジャックは更に混乱した。彼の人生で経験したことがない程に混乱した。とめどなく涙を流しながら。そんなジャックを置いて勇次郎は去っていった。

それからジャックは家に帰ったがどうやって帰ったのか彼は覚えてなかった。

だが翌日から彼はよく喰らいよく寝た。父の言葉を守るかの様に。

喰らっては寝て。起きては喰らってまた寝る。そんな日々が3日過ぎた頃、彼の身体に変化が起き始める。なんと筋収縮していた身体が肥大し始めたのだ。

そして2週間が経つとジャックの身体は激変していた。枯れ枝のように細かった腕は女性の太股か胴周りかと言える程に太くなり、肋が浮いて貧相だった胸板はぶ厚いゴムのようなくまましい筋肉を纏っていたのだ。

洗面台で最低限の身嗜みを整えたジャックはバッグを片手に家を出る。そして意気揚々とジムに向かって歩く後ろ姿には、澆刺とした気力が満ちていたのだった。

第21話『アメリカ旅行とプロレスラー その6』

「どうしても理解出来なかった。パパの言うスピリットが」

朝食を共にした後、不意にJ.r. がそう言った。

「教えてくれヨシオキ。スピリットとは何だ？」

「難しい質問だねえ。そうだな……強いて言うなら道標かな」

「道標？」

「そう、一番カッコいいと思う自分に辿り着く、あるいは一番カッコいい自分で在り続けるための道標……というのが俺なりの解釈だね」

俺がそう答えるとMr. が頷く。

「なるほど、そういう解釈もありだね」

「Mr. は違うんですか？」

「私もほとんど似たようなものだよ。ただ私の場合はこういう自分で在り続けるための道標……といった感じかな」

「なるほど、確かに似ていますね」

理想の自分を思い描くというのは一緒だ。けど俺とMr. では決定的に違うところ

がある。それは俺は理想像が不明確なのに対しM r. は明確にあるということだ。流石はM r. だね。

「ちよつといいかい？突然だけど刃牙君はどうなりたいとかはあるかな？」

「俺？俺は親父より強くなりたい」

「単純明快でいいね。至極困難ではあるけれども」

「うん、わかってるよ」

勇次郎さんよりも強くなる。強い定義は色々あるけど、刃牙君の場合は勇次郎さんとの喧嘩で勝つことだろうから、最も困難な理想像と言えるね。

「じゃあ克巳君はどうかな？」

「俺っすか？そうですね……これといって考えたことないですけど……強いて言うなら、空手の歴史に新たな一步を刻みたいかな？」

「これまた困難なものだね」

「でも、やりがいはある……でしょ？」

世界に数多ある武術、武道の開祖や継承者。その人達と同様……或いはそれ以上の創造の苦しみを味わうだろうね。けどそれ以上の楽しさも味わえるかもしれない。そう考えると克巳君の言う通りにやりがいはあるね。

「さて、ここらまで聞いた上でJ r. はどうかな？」

「……わからない」

「そっか、じゃあそれを探すのを当面の目標とすればいいんじゃないかな？」

「探す？」

J・r. の言葉に頷いて言葉が続ける。

「そう、探す。理想の自分、成りたい自分を探すために強くなる。色々なことを経験する。そういうのも楽しいと思うよ？ほら、自分探しながら物語の主人公みたいだろ？」

そう言うとうとJ・r. はポカンとした後に笑い出した。

「はっはっはっ！サブカルチャーの主人公か！うん、悪くない。なにせ僕のパパはサブカルチャーの主人公以上に偉大だ。なら僕もサブカルチャーの主人公みたいに自分探しをしてみようかな？」

コップの水をグツと飲み干したJ・r. は席を立つ。

「すまないがその2人、僕とスパーをしてももらえないかな？」

「いいぜ、今日こそ名前を覚えさせてやる」

「まった克巳さん、最初は俺がやる」

「いいや俺だ」

そんな風に和気藹々と話しながらJ・r. 達は出ていった。さて、俺も行くのかな。

「ところでヨシオキ、君はどうなのかな？」

「うくん……俺も探している最中なんですよ。最高のプロレスラーってのを」

「最高？最強ではなくか？」

「ええ、最強は退屈ですから」

そう答えるとMr. は肩を竦める。

「多くのファイターを敵に回しそうな発言だ」

「一向に構いませんよ。いつ何時、誰の挑戦でも受けますから」

「流石は猪狩の愛弟子といったところかな」

お互いに顔を見合わせて笑った俺達はJr. 達の元にゆっくりと歩いていったのだった。

幕間『その頃の大人達』

東京のとある高級料亭にて二人の男が会食をしていた。一人は猪狩完至。日本のプロレス界が誇る二大巨頭の内の一人だ。

そしてそんな猪狩と会食をしているのは愚地独歩。世界一の会員数を誇る神心会空手の総帥だ。

「よくもまああそこまで育て上げたもんだ」

独歩の言葉に猪狩は頭を掻く。

「育てたというよりは勝手に育ったが正しいな」

そう言った猪狩は茶を一口飲んでから言葉を続ける。

「俺がやったのはプロレスの基礎基本を教えたことと、あいつに腹一杯食わせてやったことだけさ」

「そんな当たり前が出来ない指導者もいる。それを考えりやあんたは立派さ。まあ、あれほどの逸材をプロレスに取られちゃったのは業腹だがな」

独歩の言葉に猪狩は肩を竦める。

「よく言うぜ。おたくなんか血縁まで結んでるじゃねえか」

「おいおい、そつちだつて娘婿にする準備万端じゃねえか」

「それは仕方ない。娘が惚れちまつたんだからな」

気安く話し合う二人の様子はまるで長年の友人の様であるが、こうして二人きりで会話をするのは今日が初めてだ。

そんな二人が気心を知るのは種類は違ふとはいえ、二人共にそれぞれが己が道を進んできた者だからだろう。

「それで、おたくも中国に行くつて話だつたな？」

「ああ、紹介してくれるかい？」

「いいぜ、先方に話は通しておく」

独歩は良意との試合以来中国武術の理合に惹かれていた。日本の古武術と似ている様で違うその理合は、まるで初めて買ひ与えられた玩具の様に光輝いて見えるのだ。

「四百年の空手の歴史に加わる新たな一年……そいつを克己にだけやらせるんじや、流石に甲斐性なしつてなもんだろ」

「何を言つてやがる。お前さんがやりたいだけだろうが」

「おいおい、俺あ先達として若いのの手本になろうとだなあ？」

呆れる様な雰囲気の猪狩に独歩は諭す様に話す。だが猪狩はこれ見よがしに大きなため息を吐いたのだつた。

貸し切られたアメリカのとある高級ホテルのレストランに妙齡の美女達四人が集っている。

一人は朱沢江珠。範馬勇次郎の妻だ。

もう一人はエマというイギリス人女性。伯爵の爵位を持つ紳士の孫娘である。

更にもう一人はアメリカのチャイニーズタウンを牛耳り本国にも多大な影響力を持つ華僑の孫娘。名を一鈴（いーりん）という女性である。

そして最後の一人がかつて中東の紛争地帯にて勇次郎に救われた民族の長の娘であるサーラだ。

「皆さん、すみませんがもう少しお待ちを。後一人いらっしやるので」

江珠が話す様に彼女達が囲む円テーブルにはもう一つ椅子があった。江珠の言葉に従いそれぞれが好む茶を飲みながらゆっくりと待っていると、やがて軍人の様な服装の女がやって来た。

その女の名はジェーン。ジャック・ハンマーの母である。

「ようこそ。貴女がジェーンさんね？」

「……ええ、そうよ」

感情を面に出さず仏頂面のジエーンは、江珠に勧められて椅子に座る。

「手早く頼む。私は任務と言われてここににいるに過ぎない」

「そう？けど残念ながら明日の朝まで拘束することになりそうね」

「なに？それはどういう……っ!?!」

突如背後に現れた濃密な気配にジエーンは椅子を倒して立ち上がり振り返る。

すると……。

「……勇次郎」

そこには範馬勇次郎の姿があった。

勇次郎はおもむろにジエーンを抱き上げると背を向ける。

「なっ!?!何をする勇次郎!下ろせ!」

「江珠、後は任せた」

「はい、ごゆっくりと」

暴れるジエーンを優しく、されど離さぬ様に抱き上げたまま勇次郎はレストランを

去っていった。

「さて皆さん、もうお気付きでしょうけど、ここに居るのは皆があの人に惹かれた者達で

す」

「ええ、それは理解しました。ですがMrs. エミ、貴女は何をしたいのですか？」

エマの言葉に江珠は柔らかな微笑みを浮かべる。

「単純なことですよ。ただ家族として仲良くしたいだけです」

「……それは、私達もあの人のご寵愛を受けられると受け取っていいのですか？」

「ええ、その通りです」

二人の会話にこの場の全員が驚いた。勇次郎は地上最強の雄である。そんな勇次郎の寵愛を独占せずに分け与える。同じ女として信じられない行動だった。

「あの人は本来とても優しい人です。ですが雄としての純度が高過ぎるが故に、他の男性よりも雄としての本能までも強い。その結果、周囲から理解を得られず孤独でした」

「ですがあの人に本当の意味で友と呼べる人が、あの人を本当の意味で理解出来る人が現れました。その人のおかげで私は本当の意味であの人の妻になれたのです」

「そんな未熟者の私がどうしてあの人を独占出来るでしょうか？もちろんあの人の妻に相応しくなるべく己を磨き続けてはいますが、それとこれとは話は別です。あの人を認め、求めた女性であるのなら、私に受け入れないという選択肢はありません」

彼女達は勇次郎に恋する女である。だが目の前の江珠は勇次郎を愛する女性であり、家族を慈しむ母親であった。そんな江珠の微笑みに彼女達は敗北感を味わった。

だが勇次郎が認め、求めた女性達はそこで終わる程に弱くない。誰もが女傑と呼ぶに

相応しい素質を持った女達なのだ。

「……………厚意、ありがたく。けど、貴女から正妻の座を奪ってしまったても構わないでしょう？」

「ふふ、どうぞでいい随意に」

やれるものならやってみろという挑発的な江珠の微笑みに女達は闘志を燃え上げながら燃え上がる。

そして会食を終えると女達は勇次郎とジエーンがいる部屋へと向かうのだった。

余談ではあるがこのレストランに集ったのは勇次郎が認め、求めた者達の半数である。

では何故残りの半数は集らなかったのか……それは残りの半数の者達が生物学的に『男』だからである。

その勇次郎に求められてしまった男達がどう過ごしているのかは……あえて語るまい。知らぬが仏という言葉もあるのである。

第22話『中国旅行とプロレスラー』

アメリカでの2週間の滞在を終えた俺達はJ・r.を加えた一行で中国へと飛び立った。

「ヨシオキ、中国では何をやるんだ？」

「皆には俺の中国拳法の師父……つまり師匠と会ってもらおうと思ってるよ」

「ヨシオキのマスター？興味があるな」

あの日以来J・r.は変わった。負けを恐れなくなったり、強者との戦いを嬉々として望むようになっていた。

「俺も興味あるな」

「ボーイにはまだ早いんじゃないか？」

「くそつ、近いうちに絶対名前を覚えさせてやる」

アメリカ滞在の2週間で克巳君はJ・r.に名前を覚えさせることに成功したけど、刃牙君は失敗してしまった。まあ、刃牙君はまだまだ成長途上だから仕方ないんだけどね。

長いフライトが終わり中国の空港に下り立つと驚きの人が迎えに来ていた。

「良意、待っていたぞ」

迎えに来ていたのは2年前に知己を得た烈永周（れつ えいしゅう）さんだった。何故彼がと思つたが、前回中国に訪れた時に再戦の機会を待つとか言つてたっけなあ。

「永周さん、お久し振りです」

「ああ、久し振りだ」

握手を交わすと彼が前回会つた時よりも更に功夫を積んだのがわかる。

「どうやら更に功夫を積んだようだな」

「それは永周さんでもでしょう？」

「ああ、これは擂台賽が楽しみだ」

擂台賽とは中国拳法界で行われる武術の祭典みたいなものなんだけど、この擂台賽に出場するには海王の称号を持つか、海王か中国拳法界重鎮の推薦が必要になる。

永周さんの性格を考えると推薦は断ると思う。……つてことは？

「永周さん、海王になつたんですね」

「ああ、郭老師から許しを得てな」

「師父から？」

永周さんの師父は白林寺の劉海王のはずだけど、何で師父から？

「正式に郭老師の弟子にしていたのでな」

「よく劉海王が認めましたね？」

「中国拳法界に郭老師の言に異を唱えられる者はおらんよ」

師父が呆れるほど強いのは知ってるけど、そんなに偉かったんだな。……そう言えば猪狩さんが師父は中国拳法界でもトップクラスのお偉いさんだと言ってたっけ？ うん……あの師父がねえ？

「ところで良意、そちらの少年達を紹介してくれないか？ 君が連れてきたのを考えると、見所のある者達なのだろう？」

そう言われたので刃牙君達を紹介する。刃牙君達も感じるものがあつたのか、永周さんと握手をすると驚いた顔をした。

「君達と手合わせをするのが楽しみだ。さあ、案内しよう。改めて中国によろこそ」



side : 愚地独歩

今俺の目の前には中国拳法界伝説の郭海皇がいる。小突けばくたばつちまいそんなご老体だつてのに、その身に纏う覇気はオーガと比べても見劣りしない。

「風の噂で聞いておるよ。日本の空手界の武神の異名は」
「いやあ……」

正直に言つて武神つてえ異名は目の前のご老体にこそ相応しいと思つちまう。とはいえ俺も武の道を生きる者。おいそれと譲るわけにもいかねえか。

すつと不意に郭海皇が立ち上がる。

「百の言葉もよりも一度の手合わせ……儂らはそういう人種であろう？」

「ははっ、違えねえ」

立ち上がつて屋敷の外に出るとそれとなく対峙する。

「では、空手四百年の歴史を拝見させてもらおうか？」

……こりや出し惜しみする余裕は欠片もねえや。

「こつちこそ中国拳法四千年の歴史を堪能させてもらうぜ？」

「はっはっはっ、堪能出来るといいのう？」

俺は俺だけの拳……『菩薩の拳』を作ると、郭海皇に向かつて踏み込んで行くのだつた。

第23話『中国旅行とプロレスラー その2』

「よう、先に邪魔してらぜ」

永周さんの案内で師父の屋敷にたどり着いたのはいいんだけど、何故か独歩さんがいた。しかもボロボロになって。

「楽しめましたか？」

「まあな。理解出来てねえところも多いが、俺の空手を成長させるには十分に堪能したぜ」
独歩さんとそんな会話をしていると、頬に絆創膏を貼った以外は無事そうな師父がふらりと現れる。というか独歩さん、師父にダメージを与えられたのか……凄いな。

「待つてたぞ、良意」

「はい、お待たせしました師父」

「うむ」

師父に刃牙君達を紹介すると興味を向けるが、特に刃牙君に興味があるらしい。もしかしたら独歩さんみたいに勇次郎さんを知ってる感じかな？

「そっちの若いの達にも興味はあるが……」

パンパンと師父が手を叩くとこれでもかと大量の料理が次々と運び込まれてくる。

「先ずは腹を満たすといい。お代わりは幾らでもあるでな。好きなだけ食え」

一早く椅子に座ると俺に続いて刃牙君達も席に座り食事が始まる。

師父が用意する料理は医食同源に基づいた薬膳料理なんだけど、そのおかげなのかこうして食を進める毎に腹の内側から癒されているように感じる。そして旨いから更に食が進むんだよね。

「食休みが済んだら適当に外に出てくるといい。烈、その時は若いの達の相手をせい」
「はっ!」

食事が終わると師父は不意に立ち上がってそう言う。永周さんはそれに拱手をして応じる。

「良意、お前は倉庫に用意してある岩を持ってくるように」

「いいですけど、あれをやるんですか?」

「うむ、若いの達に見せてやるといい」

その言い様だと師父がやるんじゃないやなくて俺がやるのか。まあ、いいけどね。

適当なタイミングで倉庫に向かうと何故か独歩さんがついてきた。

「克巳君達の手合わせを見なくていいんですか?」

「見なくても結果はわかるからなあ」

「まあ、だいたい予想通りになるでしょうね」

アメリカ滞在で刃牙君と克巳もレベルアップしたけど、それでも永周さんに勝ち目が出る領域には達していない。J・R. は結構いい勝負をするだろうけど、経験の差で負けるだろうなあ。

「それで、どうでした？」

「おいおい、主語をつけろよ」

いつもこうやって問い掛けてくるのはそつちでしょうに。

「まあ、そうだな……俺もまだまだ強くなれるって実感出来たぜ」

そう言いながら独歩さんは右手で変わった拳の形をとった。それが独歩さんが見つけた自分だけの拳の形なのかな？

「それはよかったです」

「おう、というわけで今度組手をやろうや」

「どういうわけかはわかりませんが、組手の件は了解しました」

倉庫に辿り着くと待っていた使用人の人に開けてもらい中に入る。

そして……。

「よつと」

倉庫中央に鎮座していた岩を担ぎ上げた。

「……呆れる程の怪力だな」

「プロレスラーですから」

「……そういうことにしとくわ」

ため息を吐きながらつるりと頭を撫でる独歩さんを尻目に、俺は岩を担ぎ上げたまま外に向かうのだった。

さて、刃牙君達はどうなってるかな？

第24話『中国旅行とプロレスラー その3』

独歩さんと話をしながら岩を抱えて歩いていくと、永周さんとJ r. が手合わせをしているところだった。

チラツと様子を見るに刃牙君と克巳君はもう終わつたらしい。まあ、永周さんと二人の現在の力の差を考えれば当然といえれば当然かな。

「おう、どうだった克巳?」

「どうだったって……うおっ!? すごいな三浦さん!」

克巳君の声に反応して刃牙君もこつちを見るけど、刃牙君も克巳君同様に驚く。刃牙君は前に俺が熊を担いだのを見てるはずなんだけど、熊と岩じや見て受ける印象が違うか。

適当な所に岩を置くと俺も永周さんとJ r. の手合わせを観戦する。

うん、J r. は良く対応しているね。J r. がM r. から教わつたアライ流戦闘術はボクシングをベースにしているだけあつて至極シンプルなものだ。

攻撃手段は大別してジャブ、ストレート、フック、アッパーの四種類のみ。

これで空手やキックボクシングといった打撃系格闘技やテイクダウンを狙ってくる

レスリング選手や柔術家、更には目突きや金的も狙ってくる武術家といった相手も含めたあらゆる相手に対応するべく構想、練り上げられたのがアライ流戦闘術だ。

初めてMr.とJr.に会ってその流儀を知った時は流石に厳しいんじゃないかと思っただけ、いざ体験してみると不可能じゃないと感じたんだよね。

なんせやるのが本場にシンプルだから、既に確立した技術の習得やそれらの技術のアップデートのスピードが他の競技や流派と比べて早いんだ。

もちろんシンプルなそれであらゆる相手と戦うには戦術やら経験やらも必要だけど、なによりも相手を怖れない強靱な心……Mr.が言うところのスピリットが必要になる。

Jr.はまだまだMr.の様な類い希なスピリットは得ていないけど、それでも永周さんと善戦出来ている辺りに成長を感じるね。

「破ッ！」

気合い一閃、永周さんの崩拳が腹に決まってJr.が膝を地に突く。ここまでかな。

「うん、この辺でよかろう」

「はっ！」

拱手をして頭を下げる永周さんからはまだまだ余裕を感じる。対してJr.は多くの汗を流して一杯一杯の様子。まあ、よく頑張ったってところかな。

「お疲れ様、J r.」

タイミングを見計らってJ r. に水を差し出すと、J r. は勢いよく水を飲み出す。うん、この様子なら大丈夫そうだ。永周さんもさっきの崩拳は手加減してくれていたしね。

「……一発カウンターを決めたんだが、ヘッドスリップで流されてしまった」

見てないからはつきりとは言えないけど、化勁か消力だろうね。たしか消力は習得中のはずだから化勁かな？

「さて良意、お客人達に打岩を見せてあげなさい」

「まあ、これを持ってこいと言われた時から予想はしてましたけどね」

師父の言葉に苦笑いをするJ r. 達に笑顔を向ける。

「それじゃ、中国拳法の荒行の一つ打岩をとくご覧あれってね」



side : 愚地克巳

「…親父、出来るか？」

「やってやれないことはねえが、ああまで綺麗にはいかねえだろうな」

三浦さんが始めた打岩を見ると幾度も鳥肌が立つ。打岩は打撃で岩の角をカットして真球に近付けていく荒行なんだが、荒行とは思えない程に三浦さんは易々と岩をカットしていく。

貫手、一本拳、平拳、正拳、手刀と手技でカットしたと思えば足先、背足、足刀、踵と脚技でも綺麗に岩をカットしていく。

「……どれだけ部位鍛練を積みや出来るようになるんだ？」

「部位鍛練もそうだが、それ以上に脱力だなありゃ」

親父の言葉に驚く。

「脱力により生み出される打撃速度……それがあの打岩をやるための要だ。もちろん、部位鍛練をしとくに越したことはねえんだろうが」

「脱力か……」

空手に限らずあらゆる競技や格闘技で重要とされる脱力……けどその脱力は技術的に理論化、言語化されてないことが多いんだが……まさか？

「親父、もしかして中国拳法じゃ？」

「お察しの通り、しつかり理合が確立されてらあ」

ならその理合を見て盗もう。そう思ったその時、親父にデコピンをされた。

「いってえな、なにすんだよ？」

「お前えにはまだ早い。今はしっかりと基礎と部位鍛練を積み上げる時期だ」

そう言われても目の前に至高の技術があるなら学びたくなるのが空手家、格闘家つてもんだらうに。

「焦んな。お前えはまだ若い。じっくりと育ちな」

「親父……」

「代わりに俺が先に身に付けとくからよ♪」

俺の中でプチッと何かが切れた。

「結局はそれが目的じゃねえか！」

「おう、何が悪い？そう簡単に父親超えをさせてたまるかよ」

親父との口喧嘩が続いていく中で三浦さんの打岩が終わった。この岩を見て拳足でカットしたなんて思う奴はいないぐらい綺麗な真球だ。

(……いつか俺もこれぐらい出来るようになってやるぜ)

内心そう思いながら俺は闘志を燃え上がらせるのだった。

第25話 『中国旅行とプロレスラー』 その4

「擂台賽？　そういうえば中国に来た初日に何か言ってたね」

「擂台賽は中国拳法界で4年に一度行われる祭り……まあ、中国拳法家最強決定トーナメントって言ったらわかりやすいかな？」

中国に来て5日が経ったが、今日は来週行われる擂台賽について刃牙君達に話していた。

「それでその擂台賽には海王であるか、もしくは海王かそれに比する中国拳法界の人物から推薦を受けないと出られないんだ。そしてここには推薦が出来る人物が師父、永周さん、俺の3人がいる」

「……つまり一人溢れるってえわけか」

独歩さんの言葉に頷く。

「それで勝手ですけど実は推薦する内の2人はもう決まっています。師父は独歩さんを、俺はJ.r.を推薦します」

「烈さんは？」

「まだ決めていない。そこで刃牙君と克巳君に提案だ。今から6時間後に二人で試合を

してもらおう。ルールは目突き以外は何でもあり。勝利報酬は擂台賽の出場権……やるかい？」

俺の問い掛けに二人は力強く頷くとそれぞれ部屋から出ていった。

「ヨシオキ、二人の試合のルールの意図は何だ？」

「答えは簡単、刃牙君に勝ち目を出すためだよ」

J・r.の問い掛けにそう答える。

「一般的な格闘技のルールだと今の刃牙君に勝ち目は無い。けど目突き以外の制限を取つ払えば少しだけ勝ち目が出る」

「後は刃牙がその少しの勝ち目を掴み取るか、あるいは克巳がしっかりと刃牙の勝ち目を掴み取って勝つかってとこだな」

独歩さんの言葉に頷く。

「しかし、わずか13の少年が克巳君に勝ち目があるというのが衝撃だな。私が13の頃だったならば無理だろう」

「それを認めることが出来るのが永周さんの強みですよ」

「そうなれたのは良意、君のおかげだ。数年前までの私は思い返せば傲慢甚だしい男だった……穴があれば入りたいと思うぐらいだ」

永周さんの言う通りに昔の永周さんはちよつと……いや、かなりの自信家だった

なあ。

師父に言われて当時の永周さんの鼻っ柱をへし折ったんだけど、それからの永周さんの変化と成長は驚く程だ。人ってこんなに変わるものなんだと今でも感心するよ。

「それで良意……どう見る？」

師父の問い掛けに少し考える。

「まあ、刃牙君は見せ場を作れると思いますよ。そこから勝ちまで行けるかはちよつとわからないですけど」

「ふむ、まあ楽しみにしておくか」



side : 範馬刃牙

(克巳さんとの試合か……正直に言えば勝ち目はほとんど無いと思う。でも三浦さんが提案してくれたルールのおかげで少しだけ勝ち目が出てきた)

シャドーをしながらイメージするのは克巳さんの空手。独歩さんの空手が重厚で多彩だとすると、克巳さんのそれは力強くて軽快って感じだ。

(鍵になるのは金的……でもそれは克巳さんもわかってる)

金的を本命にしても多分当たらない。ならそれを囮にして下に意識を向けさせてハイクック……って感じかな？

「うしつ、だいたいの方針は決まった。残り5時間、しつかり準備するか」



side：愚地克巳

(目突き以外有りつてことは金的有りつてことか……厄介だな)

金的に威力はそれほど必要ない。まぐれでもなんでも当たつちまえばほぼ勝ちが決まる。

とはいえ下に意識を割き過ぎれば顔を狙われてKOつてのもありえる。……なんとも厄介なルールだぜ。

(けど、それでも勝ちきれなきや親父や三浦さんの領域には辿り着けない)

四百年の空手の歴史に新たな一歩なんて嘯いちゃまったからな。目突きはないとはいえ、実戦に近いこのルールは避けては通れない道だ。

「お互いにしんどい道を選んじまったな。けど、譲らねえぜ」

試合まで5時間、準備の時間は十分にある。

刃牙……全力で勝ちに行かせてもらうぜ。

第26話『中国旅行とプロレスラー その5』

擂台賽の出場権を賭けた刃牙君と克巳君の試合が始まった。刃牙君は斜に構えていつも通り軽快にステップを踏んでいる。対して克巳君は前羽の構えだ。

双方の構えにはそれぞれの流儀とも言わべきものが現れている。刃牙君は積極的に勝利を、克巳君は負けない事を狙ったもの。戦士と武道家の違いって感じた。

「シッー」

先手は刃牙君。ジャブを放つが克巳君にリングされダメージは無し。克巳君が返して前足の下段蹴りをしようとするが、それに刃牙君が反応したところで蹴りを止めた。

「……金的は本当に厄介だな」

「克巳さん、守ってばかりじゃ勝てないよ」

「空手は武道。先ずは負けないことが大事なんだよ」

刃牙君の挑発をスルリと流した克巳君はその後も守勢に徹する。刃牙君が焦れるのを待つてるんだろうね。

対する刃牙君は各攻撃のフォロースルーも全て金的を狙える様に重心を調整してい

る。あそこまで巧みに重心を操作出来る13歳はちよつと見たことないレベルだ。
「シッ！」

克巳君が反撃に出た。刃牙君の前足に対して前足でのカーフキック。一度距離を取った刃牙君がその痛さに足を抱える。

「イツツツタアツ!?!」

「どうだ?効くだろう?」

ローキックとカーフキックの違うところは、大腿より筋肉の薄い下腿を蹴ることだ。それにより受けるダメージが全然違ってくる。受け方を知っていればダメージを消すどころか逆に蹴ってきた相手にダメージを与えることも可能だけど、そこら辺は空手家である克巳君は熟知してるだろうね。

刃牙君がやや慎重になった。これがカーフキックの厄介なところでもある。

カーフキックはダメージもそうだが、それ以上に攻撃距離と速さが厄介なんだ。

ローキックは大腿を蹴る都合上ある程度足を上げる必要がある。対して下腿を蹴るカーフキックはほとんど足を上げなくていい。必然、攻撃距離と速さはカーフキックの方が上になる。その上で無視出来ないダメージとなれば厄介極まりないだろうね。

少し慎重になっていた刃牙君が蹴りを放つ。お返しとばかりにカーフキックだ。

それに克巳君は軽く膝を折りながら脛の角度を変えて受ける。そうすることで自身

のダメージを減らしながら相手の蹴り足にダメージを返す。

「……なるほどね」

カーフキックをしてから直ぐに距離を取った刃牙君は、受けられて痛む足を軽くプラプラさせながらニヤリと微笑む。

今の一攻防で学んでしまえるのが刃牙君の才能だ。克巳君は受けを盗まれたのを知って苦笑いをするが、闘志には微塵も揺らぎがない。随分と精神的に成長したものだ。

再び刃牙君が攻勢を強めた。克巳君は慌てず丁寧に受けていく。その受けの重厚さはまるで独歩さんの様だが、克巳君らしい柔軟さも垣間見えている。

刃牙君が克巳君に技の引き出しを開けさせ、盗み、成長していくのに対して、克巳君は自由な刃牙君のスタイルに適時適応、随時自身の空手をアップデートしていく事で成長していく。

いつまでも見ていたくなるほどに面白い試合だが、やがて決着の時が訪れる。まだ13歳と若いどころか若過ぎる刃牙君が先にガス欠を起こしたのだ。

「ハア、ハア……まだ……終わってねえ！」

飛び込みながら全体重を掛ける様に刃牙君が右ストレートを放つと、それを左腕の上段受けて受けた克巳君が右正拳突きを水月に放つ。

刃牙君がその一撃で意識を失ったことで決着。試合は克巳君の勝利。だが刃牙君はすっかり爪痕を残していた。

「克巳よお、気付いてるか？」

「ああ、最後の正拳で勝ててなきや俺が負けてた」

独歩さんの問い掛けに克巳君がそう答える。

そう、刃牙君は右ストレートを受けられた瞬間、左足で金的を狙っていたんだ。

もし克巳君が正拳突きで水月を正確に狙えていなかったら、もしももう少し刃牙君が疲労やダメージが少なく正拳突きで意識を失わなかったら……結果が逆転していても不思議じゃない。

それだけの可能性を見せた刃牙君はまだ弱冠13歳の少年。勇次郎さんが溺愛するのも納得だね。

第27話『中国旅行とプロレスラー その6』

試合に敗れた刃牙君は目を覚ますと悔しさを大声と一緒に吐き出した。その後はいつも通りの刃牙君に……とはいかないのも仕方ないか。トレーニングに熱が入り過ぎているけど、それは俺達周囲の人達が適度なところで止めればいい。

さて、そんなこんなでやって来た擂台賽。組み合わせが発表されると俺、克巳君、J r、永周さん、独歩さんは準決勝か準決勝までぶつからない様になっていた。たぶん師父が口出しをしたんだらうなあ……。まあいいけどね。

克巳君、J r、永周さん、独歩さんは無事に1回戦を突破した。特に克巳君とJ rも永周さんと独歩さん同様にダメージらしいダメージを受けずに勝ったのは成長した証と言えるだろうね。

この結果を受けて中国拳法界のお偉いさんが師父にクレームをつけてただけど、師父はそのお偉いさんの顎をデコピンで弾いて気絶させて黙らせていた。相変わらず自由人だなあと苦笑いをするしかない。

それはともかく4人に続いて俺もやるかなと試合に出たはいんだけど……。

「さあ、存分に叩いてきたまえ」

え〜つと……これはどうしたものかねえ？

俺の対戦相手になったのは楊海王（よう かいおう）で、中国拳法の一つの金剛拳の使い手なんだけど……。

「どうした？遠慮せずに叩いてきたまえ」

本当にどうしたものかねえ？

馬歩をして待ち構える楊海王を見ながら頬を搔く。

プロレスの試合でも速攻で終わるものもある。けどあれはセメントだったり、相手がこつちを舐めていてわからせる必要があったりする場合だ。

対して楊海王のこれは自分の流派のそれ……金剛体を試すべくこちらの攻撃を敢えて待っている感じなんだよなあ。どうしよう？

……うん、とりあえず猪狩さんに倣ってビンタでもしてみるか。



先程の試合の三浦海王のビンタ？ハハッ、あんなビンタは初めての体験でしたよ。日本の力士の張り手でもあそこまでの威力があるかどうか……。

私の修めている流派金剛拳は金剛体……つまり五体を金剛の如く強靱にすることを

旨とする流派なんです、まさかピンタ一発で脳震盪を起すとは……。

しかも馬歩でしっかりと待ち構えていたのに、ぶっこ抜かれて横回転してしまいましたからね。三浦海王の膂力は中国拳法史上でもズバ抜けていると思います。

正直に言えばあのまま目を閉じてもおかしくなかったですが、私も金剛拳を修めた海王としての意地がありました。だから立ち上がったのでしようね。

そして返しの崩拳で水月を突きました……いや、驚きました。拳を通して伝わった感触とイメージが、金剛拳が目指す金剛体の到達点そのものだったのです。

それを理解したからこそ、私はあの場で涙を流したのです。伝承でしかわからぬ未だ見ぬ理想の金剛体を知ることが出来たのですから。

だからといってあの場で弟子入り懇願はどうかと？ハッハッハッ！我等武術家は強くなるためなら恥の一つや二つ、笑ってかきますよ。

もつとも、私はあれを恥だとは思っていません。それに師父に破門を言い渡されたのも後悔していません。

何故なら私は己が武の目指す頂きを知ることが出来たのですから……。

ではこちら辺で失礼します。三浦海王に弟子入りを認めて貰わねばなりませんので。

第28話 『中国旅行とプロレスラー その7』

何故か楊海王が俺の押し掛け弟子になってしまった。師父は『弟子にしたらよい』としか言わないし、猪狩さんに電話で聞いてみたら『お前も付き人を持ってもいいだろ』と言って各種手続きを進めとくってさ。

俺が教えられるのなんて師父から教わった中国拳法と、猪狩さんから教わったプロレスぐらいだぞ？ 2人はそれでいいって言うし、楊海王もそれが知りたいって言うし……まあ、それでいいならいいかと開き直るしかないか。

そんなわけで俺の身の回りの世話を始めた楊海王もとい楊さん。年上の楊さんに身の回りの世話をされると違和感が凄いけど、曲がりなりにも俺は師だから慣れないといけないんだろうなあ。

それはともかく、擂台賽は準々決勝まで進んだ。俺と独歩さんと永周さんは既に勝ち上がり準決勝に駒を進めているけど、準々決勝の残る最後の試合で克巳君とJ r. がぶつかる。

「良意、どちらが勝つと思う？」

「真つ当にやったら確実にJ r. ですね。けど克巳君が刃牙君との試合を忘れてなければ

「ば十に一つは勝ち目があります」

「つまり克巳の奴が甘さを消せるかってことだな」

永周さんの問い掛けにそう答えると独歩さんが言葉を追加する。

「試合をするとしたら永周さんはどっちとやりたいですか？」

「克巳君と独歩氏には申し訳ないが、私はボクシングの方が興味深い」

「まあ、たかが100年の研鑽であそこまで技術を高められちゃあな……つてどこか？」

独歩さんの言葉に永周さんは頷く。

「そう、たった100年だ。拳打にのみ集中したとはいえ、たった100年であの領域にまで昇り詰めたボクシング……武術家、拳法家としては称賛せざるを得まい」

「それには同意だわな」

そんな会話をしていると克巳君とJ.R.の試合が始まった。開始と同時に克巳君が前蹴りで金的を狙うが、J.R.は半身になりながら回避と同時にジャブでカウンターを放つ。

辛うじて手を間に入れてジャブのダメージを軽減した克巳君は一転前羽の構えで守勢に転じる。

「はあ……ああまで意識を金的に向けてちや奇襲がバレバレじゃねえか」

「逆に金的を意識させる意図かもしれませんよ？」

「だから甘いんだよ。金的で決めるぐらいの覚悟はしろってんだ。負けるぐらいなら勝ち方を選ぶ必要はねえ。勝ち方を選ぶのは強え奴だけだ」

「独歩さんらしい言葉だ。けど俺は克巳君の戦い方も嫌いじゃない。克巳君は間違いなく空手家だけど、その戦い方に少しプロレス的な要素を感じるからだ。」

「全く、誰に影響されたのやら」

「すみません」

「いいさ、良意を克巳にけしかけたのはオイラだからな」



side : 愚地独歩

「やれやれだな。息子の成長は嬉しいが、勝ち負けに対しての意識が薄くなってるのちといただけねえ。若えんだからもつとガツガツと勝ちを狙えばいいものを。」

「けど悪くねえ変化でもあるんだよなあ……。俺好みじゃねえけどよ。」

J r. のワンツーを両手で捌くと克巳が下段蹴りでカウンターを狙うが、J r. にステップで避けられる。

(かあ……そうじゃねえよ。ワンツを捌いた反動で突きを打てるだろうが。)

受けと攻撃を両立するのが武道であり武術だ。それで言えば克巳の空手はまだまだってところだが、ちよいと前と比べりや断然良くなってもいるんだよなあ。

(成長著しいからこそ感じるこのもどかしさ……贅沢なんだろうが、悩ましいねえ……) 試合が終わってみれば、結局克巳の攻撃は相打ちで中段突きを一発決めただけ。まあ、それでも今は十分か。

(つたく、負けたつてのに満足そうな面して寝てやがる。世話の焼ける息子だぜ)

大の字に寝てる克巳を抱え上げると治療室に運ぶ。

「さて、次は俺の番だな。準決勝の相手は烈海王……中国拳法の雄との試合を楽しむとするかねえ♪」

第29話 『中国旅行とプロレスラー その8』

さて擂台賽の準決勝の1つ、永周さんと独歩さんの試合だ。本当は俺とJ r. の試合が先だったんだけど、J r. が克巳君にいいのを一発貰ってたから試合の後回しをお願いすると永周さんが……。

『私は一向に構わん』

と言つて永周さん達の試合が先になったんだよね。

「三浦さんはどつちが勝つと思う?」

「独歩さんかな」

2人にそれほど実力差は無い。けど経験には大きな差がある。

永周さんはその経験差を埋めるセンスを持っていると思うけど、独歩さんにはそれ以上の強かさがある。だから今の永周さんが勝つのは難しいだろうね。

それに……独歩さんには師父の頬に傷をつけるほどの打撃がある。おそらくはあの特殊な形の拳での一撃なんだろうけど……あれでどんな風に師父の消力を打ち破ったのかは想像がつかないな。

とまあそんな感じのことを刃牙君に話すと、刃牙君が独歩さんの特殊な形の拳がどん

なものかを聞いてきたので見せてあげる。

「変な形だなあ」

「そうだね。少なくとも俺には合わないよ」

「こうだろ?……うわつ、変なところが力んでパンチに全然キレが出ない」

刃牙君がああ拳の形で軽くシャドーをしてみるけど、普段の刃牙君のパンチのキレと比べると雲泥の差だ。

「けど独歩さんにはその形が合う。人体の不思議なところだね」

「うん、そうだね。あつ、始まった」

刃牙君の言う通りに独歩さんと永周さんの試合が始まったのだった。



side : 烈海王

愚地独歩。日本の武道である空手を修める拳雄。

虎殺しを始めとした数々の噂は我が中国拳法界にまで伝わっていたが、この目で見ただ歩氏の実力はそれらの噂が嘘ではない、あるいは過小評価であったと証明するもの

だった。

「どうした、来ないのかい？」

両手を大きく上下に広げる攻撃的な構え。受けに自信があるからこそその構えか、あるいは独歩氏の好みによるものかはわからないが、私を警戒させるだけの圧を放つ程に堂に入ったものだ。

「仕方ねえ、それじゃ俺から行くとするか」

不意に構えを解いた独歩氏がズカズカと歩いて近付いてくる。反射的に足刀で膝を狙うがそこに彼の足は無かった。

足刀を空振ったその刹那、顔をカバーしていた腕に衝撃が走る。辛うじて目にした光景は、独歩氏が跳び足刀をしていたものだった。

「おっ？やるねえ」

なんでもないことだった様な様子の独歩氏。だが彼の放った跳び足刀はそんな生易しいものじゃない。少なくとも私には彼の跳び足刀の起こりが読めなかったのだ。

彼の武に対する警戒度を引き上げるが、果たしてどれほど対応出来るか……。

そんなことを思いつつ、私は自身が笑っていることに気付いた。以前の私では試合中に笑うなど考えられないだろう。

だが私は良意と出会って変わった。そしておそらく独歩氏も良意と出会って変わっ

たのだろう。

「……良意との真剣勝負の場は譲れない」

「へっ、その言葉はそっくり返すぜ」

不敵に笑い合う私達の姿は見ている者達にどう映っているのだろうか？

まあそれを気にしても始まるまい。今やるべきは巡り会えたこの好敵手に勝ち良意の前に立つ。それだけだ。

「改めて、中国拳法の烈海王」

「空手の愚地独歩だ」

「行くぞ（ぜ）！」

互いに踏み込むと私達は同時に拳を放つのだった。

第30話 『中国旅行とプロレスラー その9』

独歩さんと永周さんの攻防は互いに中々クリンヒットが出ない試合だが、確実にダメージが蓄積していつているのは永周さんの方だ。

理由は部位鍛練の練度の差。強靱な四肢による受けがそのまま相手への攻撃にもなる。二人の今の状況は武術に関わった時間の違いが如実に現れているとも言えるだろうね。

「五体を武器化するのが空手……その謳い文句に偽り無しか」

「おうよ。と、言いてえとこだが、最近の若いのは部位鍛練をサボりがちなんだよなあ……」

「ふつ、それに関しては中国拳法界もあまり変わらん」

少し前に師父が昨今は簡単に海王が生まれ、その質は下がっていく一方だと嘆いていたことがある。けど俺を弟子にして1年で海王にしたこともあって、そのことについてはあまり強く言えないんだとか。

「このまま真つ当にやりあっては勝つのは難しい……小細工をさせてもらおう」

「おう、いいぜ」

独歩さんの返答を受けた永周さんの胸が大きく膨らむ。あれをやる気だね。

右手で作った砲身を口に当てた永周さんが鋭く息を吐く。すると空気の弾が独歩さんの眉間に当たり簡易的に目潰しをした。

思わず目を閉じた独歩さんに間合いを詰めた永周さんは急所の壇中に崩拳を放つ。しかし……。

「カッ！」

気配だけを頼りに繰り出した独歩さんの回し受けに防がれてしまった。

「……これも防ぐか」

「危なかつたぜえ？もうちつと気配を消されてたらくらつてたわな」

俺と地下で試合をした時の独歩さんなら間違いない今のはくらつてたはずだ。

あれから成長したのか、あるいは師父との手合わせで何かを掴んだか……両方かな？

「さて、今度はこっちの番だな」

踏み込んだ独歩さんは前手での目潰しをフェイントに、水月への足先蹴りを放った。足先蹴りを受けた永周さんが後方に吹き飛ぶ。

見た目にはクリーンヒットした足先蹴りだけど、くらった永周さんには大したダメージが感じられない。

「……消力か」

「老師や良意ほど、まだ完璧には扱えないがな」

そう言う永周さんに独歩さんは不敵に笑う。

「ちよūdい、リベンジさせて貰おうか」

左手をダラリと下げ右手だけを顎の近くに構えた独歩さんは、右手をあの特異な形にした。

すると……驚くほどに独歩さんの気配が希薄になった。

「出たか」

「師父？」

いつの間にか近くに来ていた師父に俺だけでなく一緒に見ていた刃牙君も驚く。

「曰く、菩薩の拳だそうだ」

「菩薩？」

「無垢な赤子の時に自然に形作るのがあの形……本来ならそれまでの人生で自然と癖が付き失われるものよ」

一見隙だらけにも見える独歩さんだけど、対峙している永周さんは脅威を感じているのか冷や汗を流しながら動けない。

「だがしかし、失われたはずの無垢を取り戻せたのなら、あのように極限まで気配を絶つことが出来る」

そう言いながら師父は絆創膏が貼られている頬を撫でる。

「あれを引き出せたは良し、だがあれに応じられるだけの武は……まだあやつには無い」
その後、必死に流そうと試みる永周さんだったがそれは敵わず、独歩さんの菩薩の拳で地に沈んだのだった。

幕間2 『老拳法家の回想』

side : 郭海皇

日本に渡りプロレスラーになった甥の孫の縁を頼りに、猪狩が紹介してきたのが良意との出会いの始まりじゃった。

当時は貰う物を貰ったし暇だったのもあつて数日は鍛練を見てやろうぐらいの気持ちじゃった。だが、良意の鍛練を見た初日で儂は驚愕した。

なんと、良意の奴は一度見せた儂の動きを即座に模倣してみせたのだ。それも上辺だけのものではなく身体操作そのものを模倣してみせたのだ。

その時に儂は思い出した。若き日に言われた先達の言葉を。世の中には人の皮を越えて肉や骨まで見える者がいると……。

良意に問うてみたがあやつは集中すれば実際に見えるわけではないが、なんとなく感じ取れるそうじゃ。人体に詳しくなかった当時はぼんやりとしか分からなかったそうじゃが、今ではハッキリと人体模型でも見るように見えていても不思議ではない。

それからは早かったな。猪狩に弟子に取ると一報を入れ、良意を鍛える日々を送つ

た。そして僅か1年で儂の百年の武を身に付けおつたのじゃ。

嫉妬した。世の中には己の想像を上回る天才がいるのだと分かり嫉妬した。だが、儂の百年の研鑽の日々は間違いではなかったと同時にわかり満たされもした。

何故満たされたか？答えは簡単じゃ。良意との手合わせで儂もまた成長をしていったからじゃ。

武に果ては無し。これを実感出来た今は、この命が尽きるその時まで武の道から退くことはあるまい。なんと幸せなことか。

口惜しいのは良意を身内に引き込めなかったことよ。1年が経ち良意が帰国して直ぐに、猪狩の奴め自分の娘と良意を婚約させおつた。

その時に初めて後悔したな。武の道に傾倒し身内と疎遠になっておつたことを。そうでなければ良意が帰国する前に囲い込めたというに……。

まあ、それも今となっては仕方なからう。それに良意は新たな縁を運んできてくれた。それが烈との出会いじゃ。

昨今の中国拳法界は粗製の海王が乱立するばかりで、真の海王は減る一方じゃつた。そろそろ灸の一つも据えるかと思っておつたところに才あり勤勉な烈との出会いは嬉しいものじゃつたのう。

それからは烈を鍛え、半年に一度我が元に訪れる良意と試合をさせ、二人の成長を見

守る日々。そして二人の成長を己の武に還元し自身もまた成長する日々はなんとも言えぬ幸福に満たされた日々よ。

齡百を越えて久しい今こそが全盛期……そう言えることのなんと幸せなことか。武との出会いに感謝を。

良意よ、お前と出会わなければ儂はかつての若き日のようにまた、井の中の蛙でおつたままだったよ。お前との出会いに感謝を。

まあ、それはそれとしてじゃ。烈と良意の成長を糧に儂もまた成長をせねばな。こればかりは師の特権。誰にも譲らんよ。

さあ励め若人達よ。お前達が励めば励むほど儂もまた成長していく。それが武。汲めども尽きぬ飽くなき探究の道よ。存分に楽しむがよい。

第31話『中国旅行とプロレスラー その10』

J.r. との準決勝が始まった。彼のステップワークを見るに克巳君との試合の影響はほとんど無さそうだね。

ジャブ、ダブルジャブ、ストレートからショートフック、ショートフックからショートアップと連打が飛んでくるが、それら全てを受けていく。

「うん、いいパンチだね。ちゃんと勝負をしている人の重みを感じるよ」

「……以前は打撃のテイスティングをすることを理解が出来なかったが、今なら少し理解出来るよ」

武道や武術では先ず受けることから始まる。その前段階として受身を習得するんだけど、それが出来なければ上達しないとと言われるほどだ。

受けることで視覚的な情報や効果、身体的なダメージの具合等を感じ取り、それらを自身の技術へと昇華する。これは昔から変わらない武道や武術の上達方法だ。

人は経験の無いことはイメージがしにくい生き物だ。まあ世の中にはそういった一般的な常識を超える天才もいるけど、大半が経験を元にイメージを固める。だからこそ経験を増やすために、イメージをより良いものにするためには受けなければならない。

そうやって積み重ねてより良いものに更新し受け継がれてきたのが武道や武術なんだ。

「シッ！」

J.r. はリーチを目一杯使ってパンチを繰り出してくる。そして直ぐに離れると、フェイクを交えてまた踏み込みパンチを放つ。理想的なアウトボクシングだね。

けどそれじゃあ足りない。師父の打撃を、勇次郎さんの打撃を知る俺を打倒したかったらもつと踏み込まなきゃ。

それにJ.r. も気付いているのか、一度離れて動きを止めると大きなため息を吐いた。

「呆れるほどのタフネスだよ、ヨシオキ。イガリでもそれほど耐えられないんじゃないかないか？」

「うん？ いや、今の猪狩さんなら普通に耐えると思うよ」

ジムで俺のスパリングパートナーをやってくれているのは主に猪狩さんだ。理由は現役真つ只中の選手がケガをしたら興業に支障が出るから。

それで何年も俺のスパリングパートナーをしていたからか1年ぐらい前に……『全盛期を超えちゃまったなあ……現役復帰するか？』って言ってたからね。

まあ社長業が忙しいから結局現役復帰は出来ていないんだけど、俺のスパリング

パートナー以外にもたまたま元気な若手の指導をしたりする様になったなあ。

「さて、それじゃそろそろ俺も攻めようかな」

そう言つて踏み込むとJ r. はステップワークを駆使して間合いを取ろうとしてくるけど、こちらも歩法を使つてJ r. についていく。

「そのサイズで速すぎる！」

「鍛えているからね。……はい、捕まえたつと」

J r. の左腕を取るとそのまま手繰り寄せてバックに回りクラッチ。

「受身しつかり」

「くそっ！」

悪態をつきながらも後頭部を保護したのを確認してからブリッジ。ジャーマンスーパーレックスを決めるとJ r. の意識は落ちた。

「良意、休憩はいるかい？」

「いいえ、いつ何時誰の挑戦でも受けますよ」

「いいね♪そんじや、始めるか」

J r. が担架で運ばれると、そのまま独歩さんとの決勝戦が始まるのだった。

第32話 『中国旅行とプロレスラー その11』

side: 愚地克巳

「親父……大人気ないだろ」

休憩は必要か？なんて言われたらいらねえって答えるのが男だ。あるいはいるなんて正直に言う奴もいるだろうが、競技者や格闘家なら大抵は意地でいらねえって言っちゃまうだろ。

刃牙も頷いてるし、今からでも割って入るか？

「いや、あれでよい」

そう言うのは郭老師だ。俺と刃牙が揃って目を向けると語り始める。

「常に万全の状態で戦えるわけもなし。むしろ如何なる状態でも力を発揮出来る様にせねばならん。それはスポーツマンも武道家も変わりはない」

「いや、まあ、そうかもしれないが……」

確かに空手の大会なんかだと1日に数試合するから、勝ち上がる毎にダメージが溜まっていきやすいがなあ……。

そうこうしている内に親父と三浦さんの試合が始まった。親父は最初から例のあの拳……菩薩の拳で構えている。

右の下段蹴り、左の鉤突きと放つてから本命の菩薩の拳。見事に全部クリーンヒットした。

「なるほど、こうして受けてみても、その拳の起こりは察知出来ませんね。そのせいか思った以上に効きます」

三浦さんはそう言うものの平然と立っている。相も変わらずとんでもない打たれ強さだ。

「おうよ。如何なる状況でも虚をつける拳だ。いいもんが出来ただろう?」

「はい、誰にも真似出来ない独歩さんだけの拳ですね」

俺も一度菩薩の拳を真似してみたが変に力んでダメだった。三浦さんの言う通りにあれは親父だけのもんだらう。

「それで……奴には効きそうかい?」

奴? 誰のことだ?

「効くかどうかで言えば効くと思いますよ。それで勝てるかは別ですけど」
「そうかい、効くか。なら、後はとことん突き詰めるだけだなあ」

試合中だつてのに随分と嬉しそうに笑つてまあ……後で誰のことなのか聞いてみる

か。

「そんじゃ、続けるか」

その言葉と同時に親父は右足で足先蹴りを水月に放った。だが三浦さんはその足が戻る前に掴む。

すると親父はすかさず足一本で跳び上がって上段膝蹴りを放ったが、それを受けながら三浦さんに足を巻き込みながら抱き付く様にして抱えこまれちまった。

「カッ！」

親父は一本拳で三浦さんの脇の下の急所を突いたが、三浦さんはクラッチを解かない。

「フンッ！」

三浦さんは親父を抱え込んだまま仰け反り親父を地面に叩きつけた。たしか……キャプチュードだったか？

強かに身体を打った親父は動けずにいる。そんな親父を尻目に三浦さんはパフォーマンスをして会場を盛り上げる。プロレスラーだなあ……。

多少はダメージが抜けたのか親父はゆっくりと立ち上がる。そんな親父に近付いて手を伸ばす三浦さんだが、親父は三浦さんのお株を奪う様にドロップキックを放った。

「いや、うん、あれは空手なのか？」

思わずそう溢したが、踵でしっかりと蹴りこんだドロップキックは思いの外効きそう
だ。そういう意味ではあれもありだな。

それでも三浦さんは倒れない。鼻血を出しちやいるが笑みを浮かべたままだ。

「かあく……頑丈過ぎんだろ」

「プロレスラーですから」

「そうかい。まあ、だからこそ遠慮なくブツ叩けるつてなもんか!」

親父が打撃でラツシユを見舞えば三浦さんが合間をついて捕まえ投げる。そんなやり取りが何度も繰り返される。

そうしてやがて立てなくなつたのは親父だった。

「……これでも受け身にや結構自信があつたんだがなあ」

「上手かつたですよ。打撃の人とは思えないぐらいに」

「はあ……まいった!降参だ!」

今日一番驚いたと思う。なんせあの親父が自分から降参したんだからな。

「悪いな良意。とことんやりたい気持ちもあるんだが、そいつは本番にとっておきたくてな」

「構いませんよ。ああ、よかつたら先方に話を通しましょうか?」

「いや、俺の方で伝を辿るさ。それに菩薩の拳はまだ右しか完成してなくてな。それ

じゃ奴に失礼つてなもんだろ？」

なんか知らないが2人で盛り上がってやがる。後で親父に追及しなきゃな。

こうして擂台賽は三浦さんの優勝で終わりを告げた。次は4年後……もし出れたら俺が勝てるように稽古に励まなきゃな。

第33話 『親子喧嘩とプロレスラー その1』

「そうですね、刃牙君との親子喧嘩が決まりましたか」

夏休みを利用した海外旅行から帰国して早2カ月、俺の知人や友人達と恩人に変化が起きていた。

先ず克巳君とJr. が地下闘技場のファイターになった。2人は共にDランクリーグで無双していて、近いうちにCランクに昇格しそうな勢いだ。

刃牙君は日本全国を巡りその道の達人や名人達といった有名、高名な人達と手合わせをして経験を積んでいっている。つい先日にはキャプテンストライダムの伝を頼って自衛隊のレンジャー部隊の演習場に乱入し、そこで本部さんの弟子のガイアさんと戦って勝ったらしい。

独歩さんは道場を半ば克巳君に任せて山籠りをして心身共に鍛え直したりしている。1カ月山籠りをしたら1カ月奥さんに孝行をしてといったサイクルをしているそうで、克巳君はもつと道場に顔を出せと呆れているみたいだ。

楊さんは日本に引っ越した。というか楊さんは俺の押し掛け弟子として一緒にプロレスの練習に励んでいて、最近では猪狩さんと共に俺のスパarringパートナーをして

くれている。

猪狩さんなんだけど先日、エキシビジョンマッチに出て、そこでかつて現役だった頃を越えるキレッキレの動きを披露してファンの人達を驚かせた。サプライズだったこともあつてメディアも騒いだけど、そこら辺の対応には慣れたもので、猪狩さんは素知らぬ顔で日常を過ごしている。

そして今、勇次郎さんに夕食に誘われた俺は彼からそう告げられた。

「10日後に横須賀の米軍基地だ」

「わかりました。俺も行きますね。だから存分に親子喧嘩を楽しんでください。行き過ぎそうになったら止めますから」

「……ふんっ」

江珠さんも一緒に3人で食事をしていると、不意に江珠さんが言った言葉に驚いた。

「刃牙君に兄弟が増える?」

「はっ」

愛おしそうにお腹を撫でる江珠さんの話を聞いていくとまたしても驚いた。

なんと勇次郎さんは江珠さん以外にも深い仲の女性が複数いるらしく、その女性達とも関係が続いているらしい。江珠さん公認で。

男として羨ましくないとさえ言えば嘘になるけど、実際にやるとなると大変そうだなあ。

俺は翔子ちゃん一人で十分だ。

「刃牙君は知ってるんですか？」

「親子喧嘩が終わったら伝えるつもりです。今は集中してほしいので」

「まあ、知ったら驚くでしょうからねえ。その方がいいか」

正直、親子喧嘩以上に刃牙君は精神的にきついなと思うけど、そこら辺はなんとか頑張ってもらうしかないなあ。……フオローはするけどさ。

自由過ぎる勇次郎さんの在り方に苦笑いをするしかなかったが、それはそれとして食事を楽しんでいくのだった。

第34話 『親子喧嘩とプロレスラー その2』

勇次郎さんに親子喧嘩の日を告げられた翌日、俺はジムである人物と会っていた。

そのある人物とはジャック・ハンマー。勇次郎さんの息子の1人であり、刃牙君のお兄さんにあたる人だ。

「いいのかいジャック？9日後には君も勇次郎さんと喧嘩をするんだろう？」

「……父が言っていた。唯一貴方だけが、本気で喧嘩を出来る友だ」と

ジャックのその言葉に笑みが浮かぶ。

「勇次郎さんにそう言ってもらえたなら嬉しいね」

「だからこそ父と喧嘩をする前に貴方と戦っておきたい。少しでも成長し、父に近付くために」

一般的とは言えないけどこれもまた親子愛の形の1つ。無下には出来ないか。

「そつか。それじゃ、やろうか」

そう言うジャックは即座に構えた。構えから察するにボクシングをベースにした総合格闘技……って感じかな？

いきなり右のクロスが飛んできたので受ける。うん、いいパンチだ。当てるのではな

く倒すことを狙うパンチだね。

返しのリードアツパーから右のスイングフック。左のレバーブローから右のオーバーハンドブロー。

思った通りに蹴りが無いな。使えないわけじゃないだろうけど、使わない理由はなんだろうか？

そう思っていたらジャックは沈み込んだ勢いでそのままバックに回って俺の胴をクラッチ。なるほど、いつでも組みに行けるように足を残しているのか。

バックを取ったジャックはそのままブリッジ。見事なジャーマンを決めてきた。ジャックが離れた気配を察した俺は首を使って跳ね起きる。

「あれだけやってダメージ無しか」

「プロレスラーだからね」

「俺の知るプロレスラーとは違うな……」

きつとその人はまだ未熟なんだろう。

「蹴りを使わないのは意図的かい？」

「ああ、キックよりもパンチの方が得意なんだな。そちらに特化しつつ、グラップルという選択も取れるスタイルにした」

「なるほど、よく考えているね」

苦手を克服するか得意を伸ばすか。プロレスに限らず多くのことで課題になるけど、ジャックは得意を伸ばすことを選んだみたいだね。

「元より俺には父程の才能は無い。おそらくまだ見ぬ弟よりも下だろう。だからこそ、苦手を克服する時間を得意を伸ばす時間にする必要があると考えた」

「うん、そうか」

「Mr. ミウラ、俺の才能はどうだ？俺の予想通りに父や弟よりも下か？」

「例え答えがどうであろうと君は君の道を変えない……そうだろう？」

そう問うとジャックはニツと笑った。

「なら、そんなことどうでもいいじゃないか」

「ああ、そうだな。それじゃ、すまないが続きを頼む」

この日、俺はジャックが満足するまで相手を続けた。

ジャック、君は刃牙君よりも才能は無いかもしれない。けどね、心の強さは間違いなく君の方が上だ。

だから勇次郎さんとの親子喧嘩……楽しみにしているよ。

第35話 『親子喧嘩とプロレスラー その3』

勇次郎さん達の親子喧嘩の当日、迎えの車に乗って向かったビルの屋上で思わぬ人物と会った。

「ガイアさん？」

「っ!?三浦君か……」

思わぬ人物とは本部さんの弟子のガイアさんで、そのガイアさんがボロボロになっていた。

「来たか、良意」

江珠さんと並び立つ勇次郎さんの機嫌は良い。なるほど、刃牙君達の前にガイアさんと喧嘩をしたのか。

勇次郎さんに招かれるままにキャプテンストライダムが操縦するヘリコプターに乗り込み、横須賀の米軍基地に向かう。

米軍基地に向かうメンバーは俺と勇次郎さんに江珠さん、それとジャックにジャックのお母さんであるジェーンさんだ。

「ジャック、どんな気分だい？」

「……父との喧嘩よりも弟と会う方が緊張する」

「まあ、ジャックが兄だつて刃牙君に教えるのは刃牙君の喧嘩が終わつてからだから、それまでに心の整理をしとくしかないね」

そんな会話をしていると米軍基地に到着したんだけど、米軍基地には色んな人達がい
た。

先ず克巳君にJ r、楊さんに永周さんに独歩さん、それと残りはほとんど知らない人達だね。

ヘリコプターから降りると軽く手を上げながら挨拶をする。

「やあ、刃牙君」

「三浦さん！」

「今日は観戦させてもらうよ。頑張つて」

「おう！」

独歩さんの近くに移動すると目礼をしてから話し掛ける。

「知らない人達を紹介してもらつていいですか？」

「おう、あそこにいるのがユリー・チャコフスキー。ボクサーだな。んで隣のガタイがいいのが喧嘩師の花山薫だ」

他にも日本の武術界ではそれとなく名前が知られている人達が数名。皆刃牙君と縁

がある人達らしい。

「それで、あつちにいるでかいのは誰だ？」

永周さんや克巳君といったほとんどの人達が勇次郎さんに注目している中、独歩さんだけはジャツクに注目していた。

「似てるな……もしかして、そういうことか？」

「サプライズなんで刃牙君の喧嘩が終わるまでは内緒にしてくださいね」

夜空を見上げ呆れた様に息を吐く独歩さん。まあ、気持ちはわからなくもない。

「それにしても、観戦に来るとは思いませんでしたよ」

「おいおい、敵情視察は大事だろうが」

「我慢出来ずに喧嘩を吹っ掛けるとか考えなかつたんで？」

「そんな時はそんな時さ」

やれやれ、独歩さんらしいな。

「勝ち目は？」

「ゼロですね。けど刃牙君は逃げられない。自分のために」

そう言ううと独歩さんが頷く。

「人生には一度や二度は意地を張らにやいけねえ時があるもんさ。そこで意地を張れりや結果はどうあれ胸を張って生きていける」

「けど意地を張りそこなつた時はそりや悲惨なもんだ。後ろや下ばつかり見る様になつて中々前すら向けなくなつちまう。そういう奴を何人も見てきた」

独歩さんの言う通りだと思ふ。他人から見たらバカらしいと思えても、男には意地を張らないといけない時がある。あるいは女性にもあるのかもしれない。

「理屈じゃない……つてとどこですかね」

「感情だけでもいけねえがな。まあ、そこら辺は経験だ。若い内の恥は掻いてなんぼ。励めよ若人つてな」

独歩さんと話している内に刃牙君と勇次郎さんの会話も終わったようで、2人の親子喧嘩が始まった。

第36話 『親子喧嘩とプロレスラー その4』

刃牙君が左のジャブから対角線となる右のローキック、左のレバーブローから跳び後ろ回し蹴りと淀みない連撃で勇次郎さんを攻撃するが、勇次郎さんは堪能する様に全ての攻撃を受けていく。

「動揺はないか」

「三浦さんで慣れてるんでね」

時折会話を挟むから動きは止まるけど、それ以外は一般的な親子喧嘩の範疇を超える威力の打撃を刃牙君は繰り出し続ける。

それを受ける勇次郎さんはなんとも嬉しそうだ。

「いったい誰の影響かねえ？」

「勇次郎さんは元からあんな感じでしたよ？」

そう言うのと独歩さんは訝しげな目を向けてくるけどこれは本当のことだ。

ただ当時の勇次郎さんは鬱憤が溜まり過ぎて感情を上手くコントロール出来なかっただけで、本来の勇次郎さんはああしてちゃんと受け入れてくれる度量を持った優しい人なんだ。

「それにしてもタフだな。もしかしたらお前さんよりもか?」

「あくまで俺の感覚ですけど、耐久力を含めた身体能力なら若干俺の方が上ですね。けど、身体操作能力や戦いのセンスは勇次郎さんの方がずっと上です」

例えるなら俺に最大で100の力があるとしたら、その力を95までしか使いこなせない。

対して勇次郎さんは99の力があれば、その99の力を不足なく十全に使いこなせるんだ。

そんな感じに話すと独歩さんは頷く。

「なるほどねえ……ちなみにおいらはどんなもんだい?」

「さつきも言いましたけどあくまで俺の感覚ですよ?」

「おう、それでいいから教えろよい」

俺の感覚だと俺の力を100とした場合は独歩さんは88ぐらいだと思う。けど使えているのは86程って感じかな。

ちなみに師父は99でそれを十全に使いこなせる。つまり俺の見立てでは師父と勇次郎さんは互角だ。

「ふくん……そうかい」

「不満……ではなさそうですね」

「ああ、妙に納得してる自分がいやがる。こりやいつそう稽古に励まにやならんな」

今の独歩さんじゃ勇次郎さんに勝てないって言ったのと同じようなものだけど、それで喜ぶんだから独歩さんはやっぱり武道家なんだなあ。

「よくぞそこまで鍛えた」

不意に勇次郎さんはそう言うと、デコピンで顎を弾いて刃牙君に脳震盪を起こさせた。

崩れ落ちる刃牙君を抱き止めた勇次郎さんは、優しく抱き上げて江珠さんの所に運ぶ。

「親父……俺はまだ……」

「今日はここまでだ。また遊んでやる。だからお前の兄の喧嘩を見ていろ」

「……兄？」

突然の勇次郎さんのサプライズに刃牙君だけでなく克巳君達も混乱したのかざわつく。

「ジャック……こいつがお前の腹違いの兄だ」

勇次郎さんに紹介されてジャックが前に進み出ると、刃牙君は目を見開いて驚きを露にする。

「バキ……いい戦いだった。次は俺の番だ」

そう言うとジャックは優しく刃牙君の頭を撫でる。まだ刃牙君は混乱しているけど、あの様子だとちゃんと兄弟としてやっていけそうだね。

シャツを脱いでジャックが上半身をさらけ出すと、ギャラリーから感嘆の声がかかる。

「なるほど……確かにオーガの息子だな」

そんな独歩さんの囁きを皮切りに、勇次郎さんとジャックの喧嘩が始まった。

第37話 『親子喧嘩とプロレスラー その5』

ジャックが拳による打撃を繰り返していく。ストレート、フック、アッパーと息をつく暇も無いラツシユだ。

そんなジャックのラツシユを勇次郎さんは受けて堪能していく。

「おいおい……」

思わずといった感じで独歩さんが声を上げるが、他の観戦者達も同様に驚愕している。

「……どうやらおいらはまだオーガを過小評価してたみてえだぜ」

「喧嘩する前にわかってよかったじゃないですか」

「違いねえ」

そう言つて独歩さんは腕を組むと、武者震いする身体を抑える様に己の腕を強く掴む。

「悪くない打撃だ。だが、僅かにズレている」

打撃は脱力も大事だけどそれと同時に打撃フォーム、体重移動のタイミング、力みのタイミング等も大事だ。けどジャックはそれらが微妙にズレている。

「ジャックの微妙なズレの修正は至極難しい。感覚やイメージの領域での修正だからだ。」

「急激な身体能力の成長に感覚が追いつかなかったか……」

そんな勇次郎さんの言葉にジャックは歯噛みをする。たぶん心当たりがあるんだろう。

勇次郎さんが構えた。今日の喧嘩で初めて。だがその構えはジャックのそれに酷似している。

「ジャブはこう打つ」

一歩踏み込んだ勇次郎さんがジャックにジャブを放つ。辛うじて手を顔と拳の間に挟み込めたジャックだが、勇次郎さんのジャブにより顔を跳ね上げられる。

「フックはこう」

見事な身体操作でフックを放つ勇次郎さん。それを受けてしまったジャックは意識が飛び掛けているが、歯を食い縛って堪えた。

「アッパーはこう」

顎と拳の間に両腕を挟み込めたジャックだが、勇次郎さんのアッパーにより両足が浮く。そして……。

「ストレートはこうだ」

勇次郎さんのストリートをまともに受けたジャックは後ろに一回転して腹這いにダウンした。けどまだ意識があるのかジャックは必死に身体を起こそうとする。

「未熟なれど以前会った時よりは成長した。……よくやった」

そう言つて勇次郎さんは上体を起こしたジャックの頭を撫でた。すると涙を流しながらジャックが崩れ落ちたんだけど、そんなジャックを優しく抱き止めた勇次郎さんは、抱き上げてジーンさんの所にジャックを運ぶ。

「良意」

「はい」

勇次郎さんに呼ばれた俺は上着を脱ぐ。すると勇次郎さんも上着を脱いだ。

まあ、こうなる気はしてた。

「おいおい、抜け駆けだぜ？」

「向こうからのご指名ですから」

「かあく羨ましいねえ……仕方ねえ、とつくりと見物させてもらおうか」

観戦者達の注目が集まる中で勇次郎さんの前に進み出る。

「お集まりの諸君、礼を言う。貴様らのおかげで息子達は成長した。礼代わりとして、地上最強の喧嘩をお見せしよう」

吐納法を用いてパンプアップすると、呼応する様に勇次郎さんの背に鬼の貌が現れ

る。

「刃牙君、ジャック、よく見ておくんだよ。君達が目指す、父親の背中をね」

第38話『親子喧嘩とプロレスラー その6』

横須賀の米軍基地で範馬勇次郎と三浦良意の喧嘩が始まった。見る者に魅せ、妬かせ、勉めさせる。そんな二人の喧嘩に一早く魅せられたのは花山薫だった。

彼は喧嘩師。日本において男を張る事に美德を感じる者達の間では、正にカリスマといつて間違いがない求心力を持つ男である。

そんな彼が目の前の喧嘩に魅せられた。受けも、避けも、流しもしない。防御の一切をしない殴り合い、蹴り合いに魅せられた。

無駄な口上は要らぬ。この拳で、この脚で、この背中で語る。そう、喧嘩の原典とさえ感じる二人の喧嘩に魅せられてしまったのだ。花山薫が喧嘩師であるが故に。

不意に彼の腕を掴む者がいた。隣にいたユリー・チャコフスキーだ。

「花山さん、それ以上はいけない。彼等の喧嘩の邪魔になる」

そう言つて視線を落としたユリーに釣られて足下を見た花山は驚いた。無意識に一歩踏み出していたのだ。

「……すまん。助かった」

「気にするな。気持ちはわかる」

二人の喧嘩に魅せられたが故にもつと近くで見たい。そう想ったが故の一步だった。だが喧嘩師である己が他者の喧嘩を邪魔するわけにはいかない。

顔が熱くなっている事を自覚しながらも花山は、ユリーに感謝すると拳を強く握り締めながら二人の喧嘩を見ていく。

二人の喧嘩に妬いたのは愚地独歩だ。彼は己が人生の大半を武に捧げ歩んできた男であるが故に、二人の喧嘩に誰よりも妬いた。それこそ範馬勇次郎の息子である二人よりも。

「……随分と楽しそうじゃねえかオーガ」

強くなればなるほどに不自由になる。その力の發揮場所を失っていつてしまうから。それを深く知るからこそ独歩は妬く。誰に遠慮することなく力を振るう二人に。

そんな独歩の肩に手を置いた者がいた。彼の息子である愚地克巳だ。

「……親父」

「心配すんな克巳。手は出さねえよ。今はな」

「……まあ、それでいいか」

腕を組んだ独歩の手に力が入っていることを確認してしまった克巳だが、独歩の気持ちかわかるのか特に追及はしなかった。

「で？どうなんだよ親父？」

「勝てねえな、今は」

「今は……か」

「おうよ。今はだ。これから先も勝てねえわけじゃねえ。だつたら稽古するしかねえだろ。俺達はそういう人種だ」

「……ああ、そうだな」

氏より育ち。血は繋がってなくとも、二人は紛れもなく親子であった。

この場の誰よりも勉めているのは範馬刃牙とジャック・ハンマーの二人だった。

腰を下ろしながらも二人は範馬勇次郎の打撃を、三浦良意の打撃を瞬きすら惜しんで眼に、脳に、魂に刻んでいく。

筋繊維の一本一本の動き、各部位の骨の使い方に至るまで全てが学びであった。

「……さて、そろそろ終わりにするか」

夢中になり過ぎてどれ程の時が経ったのかもわからぬが、不意に打撃を止めて離れた範馬勇次郎がそう告げる。

すると、彼の背中の鬼が哭いた。

「つしゃあー来いー！」

三浦良意の気合いに応える様に範馬勇次郎が上体を捻る。そして踏み込みと同時に上体の捻りを解放し右拳を放った。

形容し難い重厚な打撃音が二人の耳に残った。本当に人が起こした打撃音なのか疑った。それと同時にあれ程の打撃を受けた三浦良意が無事なのかと心配した。

しかし……。

「くーっ！やっぱり痛ってえーっ！」

彼は無事だった。それどころか『普通』に痛がつている。

その異常に誰もが呆然とする中で笑う者がいた。範馬勇次郎だ。

「クスクス……ハーハッハッハッ！」

範馬勇次郎は笑った。心底楽しそうに笑った。その光景に刃牙とジャックは静かに涙を流す。

「……兄さん」

「なんだ？」

「悔しいね」

「……ああ」

「今度は俺が親父を楽しませるよ」

「いや、俺だ」

「負けないぜ」

「ああ、俺も負けない」

どちらともなく手を伸ばし拳を合わせる。これにて決着。範馬家の親子喧嘩、勇次郎と良意の喧嘩は終わりとなったのであった。

最終話 『プロレスは最高の格闘技です』

範馬家の親子喧嘩、そして勇次郎さんと喧嘩をしたあの日からおよそ3年の月日が流れた。

刃牙君とジャックは克巳君やJr.と同様に地下闘技場のファイターとなつて日々研鑽を積んでいる。今では4人共にAランクのファイターとなり鎬を削り、入れ替わる様にしてチャンピオンの俺に挑戦をしてくる。

刃牙君も成長しているけど、それ以上に成長したのはジャックだ。なんとジャックの背中にも勇次郎さんと同様に鬼の貌が現れる様になった。もつとも、ジャックは勇次郎さんの様に自分の意思でその状態になれないので、今はそうなれる様に日々奮闘している。もちろん刃牙君も負けじとね。

なんとなくだけど刃牙君もそう遠くないうちに、背中に鬼の貌が現れる気がするんだよなあ。

楊さんはうちの団体からプロレスラーとしてデビューし、その打たれ強さを全面に出してファンの人達を楽しませている。ちなみに彼のプロレスラーとしての得意技は延髄斬りとシャイニンググウィザードだ。

師父と永周さんとは以前と変わらず年に2回の交流を続けていたんだけど、去年から2人共日本に拠点を持ってそこで暮らし始めた。理由は地下闘技場に興味を持ったから。2人の満面の笑みが印象深かった。

独歩さんは例の菩薩の拳を完成させると勇次郎さんと喧嘩をした。結果は勇次郎さんの勝ち。独歩さんは負けはしたけど特に後遺症もなく、また修行をし直して挑むそう
だ。

勇次郎さんは新たな家族……息子さんや娘さん達に一見すると分かりにくいんだけど相好を崩している。ただ育児のストレスってわけじゃないけど、万が一にも力加減を間違えない様にと年に2回俺と喧嘩をしているのが現状だ。なんとなくだけど、刃牙君とジャックが勇次郎さんの喧嘩相手を十全に務められる様になってもこの関係は続くと思っている。家族との触れ合いと友人との喧嘩は別腹って感じだね。

そして俺だけ高校卒業と同時に翔子ちゃんと結婚。既に娘が1人いるし、更に今翔子ちゃんのお腹の中にもう1人いるから2児の父になろうとしているところだ。

他には高校卒業してからも20歳まで身長が伸び続け今では身長227cmとなり、体重は200kgを超えた。その結果、本業のプロレスの方でマッチメイクが大変だと猪狩さんがよくぼやいている。だからといってエキジビションの相手に自分を振じ込むのはどうなんだろう？まあ、プロレスファンの人達は猪狩さんがリングに上がるこ

とに大喜びしてるけどね。

「地上最強トーナメント〜?」

「うむ、そうじゃ」

そんなこんなである日、不意に徳川の爺さんに呼び出されるとそう告げられた。

「儂が目を付けた猛者達を流派や競技の枠を越え集め雌雄を決する一大トーナメント

よ。良意、お主も参加せい」

「ふ〜ん、いいよ。出すもの出してくれば」

「よし、言質は取ったぞ」

正直に言うとは朱沢グループが俺の個人スポンサーになつてくれるから、出すもの出してくれなくてもいいんだけど、こう言っておかないとこの爺さんは際限なく好き勝手に振り回してくるんだよね。まあ、出すもの出させても大して変わらないけど、タダ働きをするよりはマシだよね。家庭の事を考えればお金は幾らあっても困らないしさ。

そう考えていると徳川の爺さんは部下の人にあれこれ指示をし始めた。どうやら本気でさつき言ったトーナメントを開催するつもりらしい。生まれながらの金持ちの行動力は凄いいねえ。

「ところで良意、一つ聞きたいことがある」

「なに?」

「御主にとってプロレスとは何じゃ?」

首を傾げると徳川の爺さんが話を続ける。

「世の中には空手や柔道といった具合に様々な武道や格闘技がある。そんな中で御主はプロレスをやっておるわけじゃが……御主にとってプロレスとは何じゃ?」

顎に手を当て考えるが、俺にとってプロレスとは何かの答えは1つしか浮かばなかった。

「徳川の爺さん、俺にとってプロレスは『最高』の格闘技だよ」

「最高? 最強ではなくか?」

徳川の爺さんのそんな疑問に頷いて肯定する。

「打撃、投げ、関節技に締め技、果てには凶器を使った攻撃まで受けて魅せる。こんな格闘技は他にはないよ」

「ふむ、確かに……ではプロレスを最強ではなく最高と言った御主にとって最高のプロレスラーとは?」

「あいにく、それはまだ探している最中だよ」

猪狩さんや斗羽さんといった偉大なプロレスラーだけでなく、まだ練習生のプロレスラーの卵達にだってそれぞれの最高のプロレスラー像がある。もしかしたら猪狩さんや斗羽さんもまだ見つけていないかもしれない。

でも、だからこそ面白い。

魅せつける。自分の凄さを。相手の凄さを。

こんな格闘技は他には無い。

こんな面白い格闘技は他には無い。

「それじゃ、そろそろ帰るよ」

「飯を食っていかんのか？」

「家族と食う飯以上に美味しい飯はないからね」

最初は腹一杯飯を食うために始めたプロレスだけど、今ではドハマリしてしまった。

仕方ないよな。こんなに面白いんだから。

「さあ、帰って飯を食おう」

俺は胸を張って歩いていく。プロレスラーとして鍛え上げた胸を張って。

「ただいま」

「おかえり、貴方」